

たちの最後の力を食ひ盡し、彼等を全く頼りないものにしたと云ふことを悟つたであらう。だから彼等をそのまま放任することは、必然的の死に運命づけるものであると云ふことも悟つたであらう。更にまたドストエーフスキイの作中人物の苦惱は、産みの惱みでなく、頽廢の惱みであることも分つたであらう。それと同時に彼は別な慰安的・激勵的な意義を得たであらう。即ち健康の秘訣と治癒の奇蹟とを悟つたであらう。そして「自我」と「非我」との統一が何に含まれてゐるか云ふことに就て、また如何なる方法で二重人格の形而上學的意識を調和することが出来るかと云ふことに就ての、明白な考へを持ち得たであらう。そしてこの上は最早二重人格の自然的な治癒を信じなかつたであらう。奇蹟も待たなかつたであらう。その代り彼は、他人の例に勵まされつゝ、また科學の力によつて治癒の奇蹟を創造しつゝ、斷乎として敏活に病氣に對する對策を講じたであらう。これこそドストエーフスキイの作中人物に對する、従つてまた彼等がその代表者となつてゐる生きた大落に對する眞に人間的な態度であり、又これこそドストエーフスキイの記念に相當する奉仕であると、私は確信する。

十一

問題の本質を斯様に見たのが批評家ドブロリユーポフである。彼が『惱み抜いた人々』と云ふ論

文に於いて論じたところのドストエーフスキイに對する評價は、今でも批評文學の傑作であるやうに私には思はれる。ドブロリユーポフの論文は、ドストエーフスキイの天才がまだその深さと力の全量を展開するに至らなかつた時代に書かれたものである。それでもドブロリユーポフは、驚くべき洞察力をもつてドストエーフスキイの藝術の根本的調子を把握してゐる。彼は次のやうに論じた、「ドストエーフスキイの作品に於いて我々は、多かれ少かれ彼が書いた凡てのものに認められる一つの共通した特質を見出す。それは、それ自身本當の完全な獨立した人間となり得る力も、その資格さへもないと自認して居る人に就ての悲痛である。」ドブロリユーポフはドストエーフスキイの作品の意義と價值とを、それらの作品がこれらの「惱み抜いた人々」の運命に讀者の興味を惹きつけることを目的としたと云ふ點に於いて認めてゐる。今一つには、それらの作品が讀者に對してこの不幸な事實の原因に就ての問題を提供して、これらの不幸なる「貧しき人々」に取つての活路がどこにあるかと云ふ問ひに對して、讀者の答へを要求したと云ふ點に於いてその價值を見てゐる。ドブロリユーポフはその當時の事情によつて、これらの問題に充分の明確さをもつて答へることが出来なかつた。彼は單に暗示するだけに留めて、あとは讀者の推測に期待しなければならなかつた。彼はその論文の最後に書いてゐる、「然らばこれらの不幸な打ちひしがれ、

虐げられ、踏みつけられた人々の境遇は、全く絶望的であらうか？ 彼等にはたゞ黙つて堪え
ることのみが残されてゐるのか？ 汚ならしいぼろ屑に成り果て、その小變の中に自分たちの
反響なき感情を保持することだけが彼等に残されてゐるのか？ 私は知らないけれども、ひよつ
としたら活路があるかも知れぬ……。」かやうにドブロリユーポフは明確には活路を示さなかつた
が、彼は讀者に向つてその活路を探すのは讀者の義務であると云つた。また、ドストエーフスキ
イの作品は讀者から緊張した思想と敏活なる反應とを要求してゐるとも云つた。その後の批評界
はドブロリユーポフがドストエーフスキイの作品に就て提出したこの問題を避けてゐる。或る批
評家はドストエーフスキイの作中人物が不幸な打ち悩まされた人々でなく、或る豫言的な深みの
ある人々であると云ふことによつて、又は我々が彼等の爲めに活路を探さなければならぬといこ
ろの人々でなく、我々自身が彼等から學ばなければならぬ人々であると云ふ理由で、この問題
を避けてゐる。また他の批評家は、ドストエーフスキイの作中人物を「奇人」と宣告して、彼
等を精神病醫の手に委ねたと言つて、ドブロリユーポフの提出した問題を避けてゐる、だが私に
は、その何れの見解もドブロリユーポフのそれと比較して、後退してゐるやうに思はれる。

ドストエーフスキイの作品には、苦痛と絶望とに充ちた生活が展開されてゐる。彼は、人々が
出口のない矛盾のうちに如何にもがいてゐるか、また、彼等が無益な鬭争に於いて如何に悩んで
ゐるかを示した。都會生活の物くるほしい雑踏の中に取り残された孤獨な人々、明日を信じ得な
い打ち悩まされた汚ならしい人々、彼等は理智を失つて無知と犯罪に陥りながらもがいてゐる。そ
して結局は絶望の極度にまで達しつゝ、自身に對する確信を失ひ、意氣地なしになつて、奇蹟の
可能に對する信仰を唯一の慰安として愛撫しながら、被働的な忍従のうちに凍結してゐる。ドス
トエーフスキイは、心を貫くやうな感情をもつて『貧しき人々』の悲痛な運命の激變を描き、讀者
の前に『地下室』から『死の家』（監獄）に至るまでの荊棘の道を物語つてゐる。作者みづから彼
等の苦難を體驗し彼等と共に興奮し、彼等と共に思考してゐる。この藝術家は、自分の亡びた主
人公や亡びつゝある主人公のために心を痛めてゐる。彼は緊張した眼光をもつて、こゝに活路は
ないか、かしこに救ひはないか、と期待しつゝ、最も絶望的な最も冒險的な彼等の一步々々に注
意してゐる。彼は自ら彼等のために活路を求めつゝ、他の人々をもこの探求に参加するやうに呼
びかけてゐる。彼は自分の作中人物の無氣力さと、彼等の絶望的な境遇とに驚き恐れてゐる。彼
は『地下室』のヒーローが告白して「我々は死んだまゝ生れたものである。そして、もう疾うか
ら生きてゐない父から生れたものである。」と云つてゐるのを、悲痛の情をもつて聞いてゐる。こ

の告白は結局、二重人格の誰でもが繰返してゐるものである。彼にはどこからも激勵の聲が聞えず、どこにも助けがない、と云ふことが心ぐるしい。彼がどこへ視線を投げて、至るところに滅亡と孤獨と沈黙の世界が延びひろがつてゐると云ふことが、彼には悲しいのである。彼は沈黙を破つて激勵の反響を聞いたがつてゐる。「野に生ける人がゐるか？」とロシアの昔の勇士は叫んだ。勇士でない私も同じやうに叫んでゐるが、誰も答へるものがない……。」

しからばこれらの人々の境遇は全く絶望的であるか？ 野に「生ける人」はゐるのか？ 人間の残忍な壓迫を終熄させることの出来る力はないのか？

野には「生ける人」(こゝではプロレタリア)がゐる。彼は同じ盲目的な雑踏と慘酷な競争との事態の下に生れた。だがそれは、競争に屈服し又は競争の打撃に倒されるためではなく、却つてそれに打ち勝ち、それを人間の智力と意志の支配に服従せしめるために生れたのである。鐵槌か鐵床か、と云ふ近代競争の残忍な法則、その勝利者と敗北者、勝ち誇れる上層と打ちひしがれた下層——かうした競争の要件の中へ、「生ける人」は集團的勞動と協同的・創造的活動との新しい生き生きした流をもたらしした。彼は、數知れぬ「我」の本然的衝突の代りに、協同的な「我々」をもたらしした。その中には數百萬の様々な「我」が調和融合してゐる。この偉大なる「我々」に於いて、たゞそ

の中に於いてのみ、「自我」と「非我」との矛盾は始めて統一への解決を見出すのである。たゞその中に於いてのみ、自己肯定と自己否定、利己主義と利他主義との矛盾は、連帶性道德の最高の綜合に於いて解決されるのである。社會生活を集團的に組織された創造に變ずること、個性の感情を個人的より社會的のものに改めること、「我」を「我々」に變ずること——之が「生ける人」の歴史的使命である。彼はこの任務を遂行するであらう。彼は自己のうちにそれを遂行するだけの力を感じて居り、意識してゐる。競争は彼を粉碎しなかつた。また無力にもしなかつた。都會生活の物くるほしい旋風も、彼をその渦卷に捲き込まなかつた。彼は都會生活の愚かしい沸騰の中に於いても、孤獨な取り残された砂粒ではない。彼はその數千の同志と共に、この騒々しい生活を双肩に擔つてゐる。自分の筋肉と神経で、彼はこの運動を創造してゐる。彼はこの事を意識して居り、この運動に對する自己の力と支配とを感じてゐる。彼は既に度々、自己の力を驗して見た。そしてその經驗によつて、彼は都會生活の流れを阻止するだけの力を持つてゐることを確信した。そして彼は自己の創造的な仕事を一時中止した。すると忽ちこの生活は痲痺した。運動は止まり、慌たゞしい疾驅と雑踏とは絶え、都會は沸騰と轟音とをやめて、重苦しい昏睡に陥つてしまつた。ところが彼は再び自己の筋肉を緊張させた。再び自己の創造的活動に着手した。すると都會は魔

法の杖で合圖されてゐるかのやうに、再び活氣づいて騒々しくなつた。そして、失はれた時を取り返さうと努むるかのやうにひどくせはしくなつた。都會に於いて勞働者は、ドストエーフスキイの作中人物が感じてゐるやうな孤獨無援の感情を感じてゐない。都會生活は勞働者を威嚇しない。またその中には何らの幻想的な神秘的なものもない。彼は都會生活に運動を與へる發條^{スプリング}を心得てゐる。この發條^{スプリング}の中で彼自身の力は第一位を占めてゐると云ふ事を知つてゐる。スフィンクスの如き都會の、謎のやうな視線は彼を驚かさなかつた。彼の思想を痲痺せしめなかつた。彼はスフィンクスの謎を解いたのである。そこでスフィンクスの目には謎の代りに驚駭が現れた。「そこへ聰明なるエジポス」がやつて來た。彼は「虚榮の市」の如き都會生活の全機構が解つた。その機構の凡ての粗雑さと不整頓と不備とを悟つた。彼は、「力強い天才たちが何のために空しく亡びるか」を悟つた。デーヴシュキンやマルメラードフやラスコーリニコフのやうな人物が、何のために亡びるかを知つた。「誰の罪だ？」が分つた。數千の人々を盲目的な力の玩具に化し、人間の力を毀損し、その本性の調和を破壊するところの粗雑な社會機構を粉碎し、建て直すことが、「生ける人」の任務となつた。彼は、朝から晩まで社會機構の進行を細心に研究してゐる、彼の鐵槌の音が朝から晩まで聞えてゐる。彼はヨリ完全な廣い調和的な新しい生活の要件を鍛えてゐるのである。

ドストエーフスキイの作品が「生ける人」(勞働者を指す譯者)の智力と感情とに向つて如何に多くのことを語ることが出來、また語らなければならぬかは、おのづから了解できる。それらの作品には、粗雑な社會機構のために加へられた苦痛が、恰も凝結してゐるやうに、壓搾された形で集中されてゐる。人間がこれらの社會的要件のために、自分自身に對し、世界に對して如何ほどの不調和に達してゐるかをこれらの作品は示してゐる。また如何に多くの人間の生命が社會機構の車輪の間にひし碎かれてゐるかを示してゐる。「生ける人」は、ドストエーフスキイの作品に展開されてゐる生活に對して決して不審を抱かない。その作中人物の苦痛や悩みや彼等の荒々しい犯罪的な發作を彼はよく理解してゐる。彼等の孤獨の煩悶、懷疑の苦惱、荒々しい憎惡、冷い殘忍性、靜かな憂はしい忍従、すべてこれらが彼にはよく分つてゐる。彼等の殘忍さと彼等の從順さには、社會生活のくだらない愚かさのために彼等から搖ぎ取られた調和と一致との渴望が表明されてゐる。死に行く人の苦惱のやうに、涙と血潮に滲んだ哀れな、同時に恐ろしい物狂ほしい彼等の煩悶に對して、「生ける人」は癲狂院や牢獄の造營をもつて答へるものではない。また奇蹟に對する信仰の説教をもつて答へるでもない。否彼は、生活を調和する意味に於いての精力的な仕事をもつて答へるであらう。ドストエーフスキイの作品は、「生ける人」をして益々深く彼の創造

的仕事の重要性を感じさせるであらう。益々深く世界的連帯心の理想の意義を評價せしめるであらう。この理想を實現するのが「生ける人」の任務である。ドストエーフスキイの作品がもたらす悲痛と苦悶の絶えまなき唸り聲は、こゝに初めて効果的な反響を見出すであらう。それが「生ける人」の心に於いては絶えまなき仕事と創造への呼び聲となり、彼をして益々生き生きと自己の仕事の神聖なこと、それを遂行すべき自分の力とを意識せしめるであらう。ドストエーフスキイの作品は、「生ける人」の心に無意義な「神経の戦慄」と奇蹟の期待とを呼び起さない。むしろ思想上および行動上の積極的な働きかけの渴望と、積極的な援助の渴望とを彼の心に呼び起すであらう。「生ける人」の心を興奮させ、彼等のうちに『貧しき人々』や『地下室』の人々に對する煩悶と悲痛の感情を起し、彼等の思想と意志とを精力的な行動に呼び覺ます力、この力のうちに私はドストエーフスキイの藝術の意義を見るのである。従つて彼の作品に於けるこの力をこそ、最も高く評價すべきであると私は考へる。

西歐に於ける影響

フアチーマ・リーザ・ザーデ

西歐に於けるドストエーフスキイ研究は、最近五十年間に亘るブルジョア社會の發展過程を反映しつつ、かなり複雑な變遷を経てゐる。ドストエーフスキイは、深刻なる經濟的恐慌を、従つて又イデオロギー的危局を體驗した社會集團の氣分を表現した作家である。然るに十九世紀後半期のヨーロッパは、工業資本主義の隆盛期を體驗してゐるだけに、没落しつつある小市民階級の破産を表現したドストエーフスキイとは没交渉である。それ故に十九世紀の末までは、ドストエーフスキイの藝術は、西ヨーロッパに於いて廣汎な興味も適當な理解も見なかつた。たゞ特殊な個々の文學通のみは彼を評價したが、それもかなり淺薄で、見解が狭かつた。この點に於いて、西歐に於けるドストエーフスキイに關する最初の評論のうちで、フランスの批評家メルキオール・ドゥ・ウオギューエの書いたものは、極めて特色的である。一八八六年に出版された彼の著『ロシア小説』に於いて、ドストエーフスキイは極めて獨立的な獨創的な天才として評價されてゐるが、併し

ギューエはドストエーフスキイを天才と認めることを躊躇した。と云ふのは、彼の考へによればドストエーフスキイは天才と認むべく餘りに偏頗であり、また節度の感情を缺いてゐるからである。

西歐のブルジョア社會が隆盛期より衰退期に移るに従つて、そのイデオロギー的氣分も變つた。帝國主義戦争はヨーロッパを本當の經濟的破綻に導いて、その結果、全ブルジョア文化の破産を來した。ロシアに於ける資本主義經濟の發達によつてロシアの小市民的知識階級の或る層が體驗した恐慌の反映として、ドストエーフスキイの藝術に具現されたイデオロギー的破綻は、その内容に於いて西歐の中・小ブルジョア知識階級が、資本主義經濟の崩壞の結果嘗めたところのイデオロギー的破産と似寄つてゐた。そこで二十世紀初頭に理解されなかつたドストエーフスキイは、西歐ブルジョア知識階級の頭上に破^{カストロフ}局が爆發すると、急にこの階級の廣い層の注意を惹くやうになつたのである。そしてこの破局の頂點であつた世界大戦中および戦後の時期は、西歐に於けるドストエーフスキイの影響の頂點であつた。この時代のヨーロッパの批評界は、もはやドストエーフスキイをバルザックやスタンダール以上にもてはやしてゐるばかりでなく、心理的解剖の深さと鋭さに於いてはドストエーフスキイをシェークスピアと比較してゐる。

ドストエーフスキイの最も強い影響は、戦後の危機を最も深刻に體驗したドイツに於いて現れ

てゐる。現代のドイツ文壇に於ける最も顯著なる文藝思潮は表現主義であるが、この一派は、全然「ドストエーフスキイの旗幟の下」にあるもので、彼等はドストエーフスキイを自分たちの先驅者または教師と仰いでゐる。

特にこの影響はヘルマン・ヘッシェ、グスタフ・メイリンク、ステファン・ツヴィクラの藝術に於いて最も明瞭に現れてゐる。ドストエーフスキイの藝術に對する研究の方面に於いても、ドイツは第一線に立つてゐる。世界大戦後の時期に於いて、ドイツではドストエーフスキイに關する數十種の著書と數百篇の論文とが發表されてゐる。フランスに於けるこの影響の最初の移植者はポール・ブルジェ（その小説『弟子』参照）であつたが、現代フランス文壇に於けるドストエーフスキイの祖述者は、雑誌『フランス新評論』を中心とする作家群の首領たる最も著明な文豪アンドレ・ジイドである。ドストエーフスキイの深大な影響は更にジュアメル、シャルル・ルイ・フィリップ、若いところではアンドレ・ベクレル、エムマヌイル・ボフの如き作家たちの藝術に於いても認められる。然しドストエーフスキイは、ブルジョア知識階級のイデオロギー的破産の表現者として、ロシアに於いても西歐に於いても廣汎なプロレタリア層とは没交渉である。同時に彼の影響は同じブルジョア知識階級の中でも主として、ブルジョアジーの忠僕でありながらその没落を鋭

く意識してゐる知識階級の或る層に於いて最も強い。

西歐に於けるドストエーフスキイの影響と研究の問題は、單にブルジョア知識階級層へのイデオロギー的接近だけに止まらない。ドストエーフスキイは、心理小説の擴大と深化とその新様式と構成との方面に於いて多くの貢献をしたばかりでなく、更に描寫と心理解剖との多くの新しい手法をこの領域に引き入れたことを忘れてはならぬ。それ故に藝術家としての彼の影響は、イデオログとしての彼の影響よりも遙かに大きい。西歐の作家たちは、ドストエーフスキイに於いて、多くの矛盾によつて複雑化された心理を持つ悲劇的人間の描寫と云ふ藝術上きわめて困難な問題の解決を初めて見出したのである。たゞドストエーフスキイの深い辨證法的な心理解剖のみが、この二重性と複雑さと矛盾性を持つた心理を、少しも單純化したり、又その矛盾を除外したりすることなしに、完全に表現することが出来たのである。西歐に於けるドストエーフスキイの影響は、主として二重性格の心理の研究に於いて、特にその最も深刻な具現たる地下室の人々の心理を理解する上に於いて、最も顯著であつた。

然しドストエーフスキイは、この危局を克服して新しい精神的更生の理論を與へようと試みてゐる限りに於いて、ブルジョア・ヨーロッパに取つては全く無關心であつた。それ故にこの理論の

代表者たる、ドストエーフスキイの積極的ヒーローたちは、たとへばムイシュキンやアリョーシャやゾシマ長老達は、西歐に於いてその模倣者を見出さなかつた。これらの人物に就ては、批評の上でも殆んど閑却されてゐる。ヨーロッパの評論界はドストエーフスキイの「我儘」なヒーローと「二重人格」の解剖に全力を集注してゐる。この關係に於いて最初は『罪と罰』が、最近では『カラマーゾフ兄弟』が、最も大きな影響と成功とを持つてゐると云ふことは極めて興味ある事實である。

作
品
研
究

『罪と罰』の研究

『罪と罰』(一八六六年)は恐ろしきまでに深刻に犯罪の心理を取扱つた小説である。ツルゲーニエフやトルストイの描いてゐる方面は、重に農奴制の下に發達せるロシア特有の文明によつて築かれたその社會状態であるが、ドストョエフスキイはもつと深く突き込んで此の文明の廢墟を描いてゐる。そしてこの廢墟を現出した恐るべき原因に肉迫してゐる。彼は鋭い眼を以て大都會の秘密を探つたばかりでなく、諸々の罪惡、苦痛、暗黒を通じて、其中から温かい光と愛と人間味とを汲み出すことを忘れなかつた。彼は聖者の心を理解してゐたと同じく、惡魔の心をも理解してゐた。信仰と不信仰、罪惡と純潔、光明と暗黒の兩方面を同じやうに洞察してゐた。彼は偉大なる靈の洞察者であつたばかりでなく、偉大なる肉の洞察者でもあつた。神と惡魔の戰場たる人間の心を描いて、これ程深刻な透徹した作は稀である。そこには愛と憎しみと怒りと喜びと凡ゆる人間感情の戦慄を見出すことが出来る。此の小説の主人公ロデオン・ロマノウチ・ラスコニコ

ニコフはドストエーフスキイの他の凡ゆる作中人物と同様に全然客觀的に描かれてゐる。作者はいつも作中人物の心的生活の中に、自ら考へたことや心に體驗したこと、自分の智的及び精神的希求や内面生活の疑問などを取り入れてゐるにも拘らず、是等の主觀的内容を帯びてゐる人物は全然客觀的に描かれてゐて、作者自身は恰も第三者の立場に立つて彼等の生活や運命を觀てゐるやうである。

物語の事件は、ラスコーリニコフのペテルブルグに於ける大學生生活の時代に始まつてゐる。其頃から彼は物質的境遇に於いて非常な窮迫を嘗めてゐたので、赤貧洗ふが如き彼は一生慘憺たる惡戰苦闘を續けなければならぬ運命を荷つてゐた。それで彼は出教授の爲に受くる僅かな報酬と偶然した賃仕事とによつて辛つと口を糊してゐたのだが、終ひには其の至つて乏しかつた賃仕事まで失つて、立つ瀬がなくなり、それに遠く田舎の方では大切な母と妹が不斷の窮迫と他人の扶助の中に苦しい日を送つてゐるといふことが痛く彼を悲ませたのである。仕事を失つた原因は一部は彼の性質からも來てゐる。本來ラスコーリニコフには反省、孤獨、逃避への強い傾向があつて、思想や觀念の内的世界が深く彼の心を囚へるので、彼は一ヶ月でも二ヶ月でも戸棚のやうな自分の狭苦しいお粗末な部室の中に引込んで絶えず冥想に耽つてゐるといふ風である。しか

もその思想には獨創的の分子が著しく、概して作者は彼の天才の非凡な方面を描いてゐる。彼は思想家としての素質を有し、凡ての事を論理的に考へ、論文を書いても必ず其中に獨特の見解を取入れる。それに立證の方法が極めて面白く、時としては深い論據を見せてゐる場合もある。概してラスコーリニコフの思想は、ニーチェの超人に關する教義の根本觀念と一致してゐる。

自尊心の強い、氣位の高いラスコーリニコフは自分の貧困窮迫を心苦しく思つてゐるので、まだ間代を拂つてゐない宿の女主人と顔を合すたびに、自分の破れた上着を見るたびに何時も甚だしい屈辱を感じる。それが爲め彼の心には忿怒と憎惡と臆病と、それから苦しみ抜いた孤獨な人々に共通なる冷酷な性質が發達してゐる。彼は一ルーブリや二ルーブリの目腐れ金のため、つまらぬ賃仕事の爲に毎日の苦行に身を任すことが出來ない。といつて、生活のどん底に突進して其所に自分の腕を揮つて活路を切り開くことは猶更できない。それをすれば彼は餘りに内省的で、鋭敏で、瞑想的である。この性質が絶えず彼の心を思索や空想やいろんな計畫やに引張るので、彼は常に偉大なる事業を夢見てゐる。さうして、其等の空想の後で自分の身の周圍の貧弱さと屈辱とを感じるのが彼には一層苦痛である。

是等の個人的窮迫と貧苦とに搗て、加へて、作者は都會生活の殘忍、酷薄、貧困、苦痛など凡

ゆる世智辛い世相と悪夢とが、主人公の感じ易い心に如何なる影響を及ぼしてゐるかを示してゐる。ラスコーリニコフは都會住民の中に於て最も貧しい階級すなはち貧民窟や地下室の住者、居酒屋や下等飲食店の常連と接觸してゐる。さうして饑饉と病苦と煩悶とに悩める彼は、作者によつて彼の前に展開された恐るべき浮世の苦痛の目撃者となつてゐる。即ち居酒屋に於ては、娘を賣つたことを泣きながら話してゐる酔つぱらつた官吏(マルメラードフ)の物語を耳にし、街道に出ては野獸のやうに荒々しい醉漢の穢はしい不仕合せな生活の跡を到る所に見、貧民窟に行つては極度の貧苦に達してゐる家族の不幸を目撃してゐる。饑渴、貧困、惡僻、犯罪、破廉恥、蠻行——それらをラスコーリニコフは自分の周圍に見たのである。夢にさへ彼は是等の悪夢の反映を體驗し、泥酔の百姓が馬を死に至るまで毆打してゐる無殘の光景を見たのである。一口で言へば作者は是等の實生活の印象によつて痛く悩まされ苛められ、さうして絶望の極に達してゐるラスコーリニコフの心を深刻に語つてゐる。

或る僥倖の後ラスコーリニコフはまるで被働的に自己を運命のまゝに任せて、賃仕事を探ねるのも止め、毎日々々自分の狭苦しい部屋の長椅子に横はつてゐる。さうして身邊を圍む凡ゆる生活事情の結果として彼の意識に燃え立つた新しい觀念に没頭してゐる。即ち或る居酒屋に於いて

不圖耳にした談話によつて、彼は殺人と云ふ思想と共に、或る場合に於て殺人は辨明し得られるものであると云ふ思想に衝突かつたのである。すると彼の頭腦には早や苦し紛れに作られた此の思想を自己流に根據付けることが始まつた。

二

ラスコーリニコフの思想は、既に以前から實人生に於ける善惡の觀念は相對的のものであると云ふ問題に集中されてゐた。彼は、善惡の彼方に在つて行爲行動の倫理的評價を超越してゐる或る少數の人の群を一般人類の中から區別してゐる。彼の説に據ると、其等の人々はその天才により、また人類に多大なる利益を與へる所から、彼等には何等の障碍もなく一切の事が許されてゐる。其他の、時流の域を出ない群衆は、現存の一般規範なり法則なりに屈服して、選ばれた少數者の最高目的の手段とならねばならぬ。選ばれた者には道德の規定はない。たとへ有つても彼等はそれを犯すことが出来る。何故ならば彼等の目的なるものは其の手段を淨むるからである。これがラスコーリニコフの説の大體である。彼は言ふ、

「我輩の説だと、例へばケプレルやニュートンの發見がすな、若し或る障碍のため一人なり十人なり乃至百人は愚か非常な大多數の妨害者を犠牲にしなけりや遍く世の中に行はれないもんな

ら、ニュートンは世界に其の發明を擴げる爲めに、これしきの少數者、高が百人や千人の人間を見殺しにするぐらゐは何でもない、爲ても差支えない権利を持つてゐる。いや、余儀なく見殺しにせよやらんかも知れない。……古來からの總ての立法者および主權者、即ちライカアガス、ソロン、マホメット、ナポレオン、と云ふやうな人たちは何れもみな多少の罪人であつた。何故なら彼等が新しい法律を布くや、自然その時まで社會が眞實に遵奉して祖先代々傳へて來た舊法律を破棄して了ふ結果になる。もし必要と認めたら隨分血を流すことをだに躊躇しなかつたかも知れない。それ故に人間の恩人、教師とも云ふべき是等の偉人の殆んど全體は、猛烈に血に渴した屠殺者であつたとも云へば可ひ得られる。」

斯様にラスコーリニコフは動物的、利己主義的目的に據らずに一般的最高目的の爲めに行ふ犯罪に於て、或る特別な人々の權利を證明してゐる。然し斯かる行爲を敢てするには道德を犯さんとする人の特殊な心的個性が伴つてゐなければならぬと彼は認めてゐる。これが爲には先づ鐵の如き意志と強固なる忍耐性とを備へた人でなければならぬ。さうして只一つ目指す所の智的目的の意識が恐怖や絶望や臆病の感情を支配して、それらに打勝つてゐなければならぬ。で、絶望と煩悶に沈めるラスコーリニコフは先づ自分が卑怯者でないといふこと、自分が自己の凡ゆる計畫

を貫徹する運命を荷つてゐると云ふこと、また自分はそれを斷行し得ると云ふことを己れ自身に證明しなければならなかつた。一切の權利は自ら進んでそれを取ることの出来る者にのみ與へられる。只茲に一の大切なことは果斷決行といふことである。」と彼は言つてゐる。斯様にして考へられた殺害計畫がラスコーリニコフの全心を奪つたのは、それが爲に金錢が得られるからではない。むしろ此の兇行は彼自身に對する勝利として、彼の力の證明として、また彼が建築の材料でなく自ら建築師であると云ふ證據として彼の心を惹いたのである。然るに彼は此の兇行を目論見ながら全然理論に趨り、哲學的思索に耽つて、行爲の結果よりも寧ろ論理上の推理に多大の興味を持つてゐる。そこが最も注意すべき點であると思ふ。彼は其計畫を實行する時ですら依然として理論家であり思索家である。さうして彼は豫め一切の事を頭の中で推考し思索したにも拘らず最も大切な事を豫知することが出来なかつたと云ふのは、畢竟彼が思想の人であつて實際の人でなかつたからである。

三

貧苦窮迫とそれに繋がる屈辱とは、自尊心の強い青年に取つて殺人を決行する最初の動機となつた。彼は高利貸をしてゐる老婆の許に質ぐさを入れに行く度に無氣味な老婆の面相と周圍の様

子とで彼の心中に喚起された嫌悪忿怒の念を抑えることが出来なかつた。してゐるうちに或時ふとした事から居酒屋に於て二人の大學生が殺人に就いて話してゐるのを聞いたのである。その時圖らずも其の中の一人の斷案が無意識的にラスコーリニコフの心中にあつた計畫の反響のやうに思はれたのである。其の一人の大學生が言ふには、

○一方には頑冥不靈で義理も人情も辨へない、吝嗇一天張な没義道、人非人極まつてる老いぼれ婆あがある。生きてゐて糞の役にも立たただけならまだしもだが衆人を苦め虐げ、且つ何の爲に世の中に生きてゐるのか自分でも更に知らずにゐる。で又、一方を見ると、有爲の青年がたゞ明け暮れの生活が立たぬばかりに中途に挫折して悄然と首を垂れてゐる。此の事實は現にそこいら中に幾らもある。もし此の老いぼれ婆あが僧院に喜捨する金子があつたなら立派な善事が百でも千でも出来る。饑饉、窮乏、落魄、罪惡、悲惨の淵から氣の毒な家族を一打も救ふことが出来る。であるから我輩はあんな老いぼれ婆あを打殺して。金子を奪つて、慈悲の爲め善根の爲めに使へと云ふのだ。如何だ、君の説は？ 殺人は罪惡にしる、これしきの小罪は千の善事を行へば優に償へる、自づから消えて了ふ。無用なる一人の息の根を止めて千人の苦しむ者を救ひ、一人を噎して百人の生命が助かるなら何でもない。君の算盤は如何なる。あんな強突張りの老いぼれ一匹の命が

如何程の價があるもんか。蟲介同然だ。いや蟲介にも劣つてる。人の生命を吸ふ鬼だ、惡魔だ。」斯くも熱心に此の見解を辯護した大學生は、自からそれを實行によつて證明することは六ヶ敷からうと自覺した。けれどもラスコーリニコフの頭には此の思想がちゃんと巢を喰つて、彼はその事を深く考へたのである。

彼は犯罪の實際的結果をも熟考した。即ち老婆の金で大學を卒業することも出来、母と妹を助けることも出来、また社會公共の爲に有益な事業を企てる事も出来ると思つた。然しその後彼は天才と群衆とに關し、力と意志の人に關し、また強い孤獨な建設家と建設の材料としての群衆に關する自家獨特の學說に全然没頭してゐる。彼は自己の力と決意とが自己の勇ましい學說を事實の上に證明するに足りると云ふことを何うしても立證しなければならなくなつた。熱病のやうに頑固な思索に悩まされ、饑餓に苦められたラスコーリニコフは、結局自分の狂暴な觀念の犠牲となつてゐる。さうして催眠術に罹つた人のやうに、暗示された道から最早や一步も離れる力を持つてゐない。初め彼は已れ自身と戦つた。心の中で何ものか彼の決意に反抗してゐるやうで、殺害の思想と哀愁と嫌惡とに痛く悩んだ。けれども其後彼は最早や已れを支配することが出来なくなつて、恰も他人の意志でも實行してゐるかのやうに、機械的に己れの觀念に屈服した。作者は云

ふ、「丁度誰か彼の手首を取つて不可抗的に、盲目的に、自然以上の異常な力で、ウンとも言はせず引つ張つたかのやう。丁度着物の裾が車輪の間に挟まつたやうに彼はヅル／＼ベツタリに其中に引摺込まれて行つた。」ふとした外部の事情は遂に彼をして意中の企圖を實行せしむるに至つたのである。實行に際しての細かい事が判明すると、もう彼は自己の「新道徳」に據る新生活の準備が充分整つたものだと思つた。然し殺害に次いで展開された幾多の事情は此の理論家に、實生活と其の事件の中には人間の抽象的理論の凡ゆる推理や判斷を粉微塵に粉碎する特殊の論理があると云ふことを示した。さうしてラスコーリニコフはその恐ろしい體驗によつて自分の過失を信じない譯に行かなかつた。

四

ラスコーリニコフは理論的決意と實行との間には往々にして深淵の存すると云ふことを豫知しなかつた。即ち學理に於いては如何に容易で、剩へ自負と傲慢に伴はれてゐる事であつても實際に於ては豫期しない恐るべき不吉な意義を現はすと云ふことを豫め考へなかつたのである。彼は胸中の企圖に就て豫め委細熟考し、且つその凡ゆる外部の結果までも想像したのであるが、然し血の流るゝ刹那、斧を振上げて老婆の頭蓋骨を打碎く刹那、乃至は其後に於ける内的自覺を豫測

することが出来なかつた。彼は理論家として、個人主義者として、ひたすら自己の事及び自己の智的目的の事のみを考へながら、而も他人に暴行を敢てし、其の息の根を斷つやうなことをしたのだ。ラスコーリニコフの思想の誤謬はその根本に於いて、彼が概して倫理法なるものに純外部的の意義を附して、或者は絶對にそれに服従しなければならぬが或者は服従しなくてもいゝ、自由であると云つたやうな形式的な解釋を與へた點に歸着する。それ故に彼は兇行を準備しながら頭の中では何時も自己の論理上の命題のみを考へて、肝腎な兇行瞬間の根本問題にはわざと考へを及ぼさずにゐる。たゞ何とはなしに心の中で彼の決心に反抗するものがあつて、それが爲め彼は、殺人を行はねばならぬと云ふことを考へる度に一種の哀愁と嫌惡とを感じるだけである。さうして犯罪決行後如何にしても自分の感覺の亂れを整へることの出来ないのを見て、彼は此の事が自分に規範を犯すだけの果斷決行の力が足りなかつたのに基因すると思つてゐる。彼はソーニャ・マルメラードワに言ふ、「ソーニャ、俺はたゞ虱を殺しただけの事ぢやないか、有害無益の汚ならしい虱を。」するとソーニャは驚いて、「まあ人間のことを虱だと仰有るの？」と叫ぶ。この言葉で彼女は人間の生活に對する自分の特殊な深い宗教的態度を示してゐる。ソーニャから見れば、倫理法や生活の誠命は深く人心の根底に賦與されてゐるもので、たとへ人間が何んな高尙な地位に達した

ところで、自己の生命を毀損し、自己の靈に暴行を加へない限り此の誠命や法則を犯すことは出來ないのである。それ故に彼女は泣き悲みながら叫んでゐる、「何故貴方は、何故貴方は此事を御自分の上に爲さつたのです？ 今では世界中に貴方より不幸な方は一人もゐませんわ」と。所がラスコーリニコフに至つては小説のエピソードの最終の行に至るまで、人生に對するソーニャの此の宗教的態度を全く解せず終つてゐる。然し作者はラスコーリニコフに依て犯された人生の根本法則の破壊が彼の實生活のうちに如何に現はれてゐるかを示してゐる。「さうして作者は、或る少數の者に殺人行爲を許してゐるラスコーリニコフの説に對するに實生活の根本論理を以つてした。然しそれはラスコーリニコフに見るやうな合理的のものでなく、寧ろ彼が如き青年理論家を壓倒し、彼が金城鐵壁と思惟してゐる凡ゆる思想を粉碎し去る所の超合理的論理である。兇行後ラスコーリニコフが陥つた精神錯亂の状態と云ひ、實生活の支柱を全然失くして了つた慘めさと云ひ、その痛々しい恐るべき煩悶と云ひ、人間の個人的論理なるものは、若しそれが實生活上の一般原則と反對の方向を取つた場合、如何に無力なものであるかを證して餘りある。

五

殺人の如き行爲を決行した人の嘗むべき凡ゆる不條理と恐怖とは、偉大なる藝術家の筆によつ

て、教訓の形に於て、兇行瞬間の鮮かな深刻な描寫の中に遺憾なくサラけ出されてゐる。抽象的理論を信じて誤れる道に進んだラスコーリニコフは忽ち事件を指導することも意志を操縱することも出來ない混沌たる状態に陥らざるを得なかつた。ソーニャの認むる如く、ラスコーリニコフはたゞに他人に殺害を加へたばかりでなく、己れ自らの上に即ち自己の靈と良心との上にも暴行を敢てしたと云ふことが、讀者の頭には自然明白になつて來る。もしラスコーリニコフが善惡の觀念の相對的なことを考へ初めたばかりの時に、此の殺害の鮮かな光景を想ひ浮べたならば、またもし彼が斧を手にする自分を見ることが出來、その斧の下で老婆の頭蓋骨の碎ける音を耳にすることが出來、同時に血の塊を見、その血に塗れた斧を取つて、盲目的な恐怖のために手を以て子供らしく彼を避けてゐる老婆の妹エリザヴェタに近づいて行く自分を想像することが出來たならば——もし彼が凡て是等のことを経験し豫覺することが出來てゐたならば、疑ひもなく彼はその様な價では何んな幸福も購ふことは出來ないと言ふことを悟つたであらう。さうして目的は手段を淨むるものでないと言ふことを解したであらう。

ラスコーリニコフによつて行はれた二重の殺人は、まるで彼の生活の基礎を破壊し盡したかのやうに、絶望と不安と無氣力と煩悶とは同時に彼を襲ひ、拂へども去り難き殺害の恐ろしい印象

は悪夢のやうに刻一刻と彼を追窮して、彼は如何してもこれに打ち勝つことが出来ない。彼は自分の考へだけでは、殺害と掠奪の後には新生活の計畫を實現しようと思つたのであるが、殺人の恐るべき悪夢は、其の後の彼が全生活を絶えず煩悶と騷擾とで攪亂した。ラスコーリニコフは兇行後の夜、自分の心的恐怖と錯亂との無意識的玩具となつてゐる。彼は熱病にでも犯されたやうな慌たゞしい氣持で部屋の中を彼方此方と歩き廻りながら、散らばつた心を集中して自分の位置を考へようと頻りにもがいてゐるが一向駄目である。思想の糸を辛つと捕へたかと思ふと直ぐに失くして了ふ。盗んだ物品を壁紙の蔭に押込んで、しかもそこからそれらの物品がはみ出してゐるのを氣付かずにある。彼は全く錯覺に捉はれ、讒言を言ひ、取留めもない心象と現實との區別が附かなくなつた。其後に至つても彼は依然として當初豫期しなかつたいゝんな結果を感じてゐる。例へば彼は全世界は勿論最も近しい人々と自分との間に非常な隔りを感じてゐる。最愛の母や妹に對する時ですら猶ほ假面を被つて暗い陰鬱な孤獨のうちに閉籠つてゐる。たとへば彼は理論的には自己の犯罪を辯護して、たゞ自己の小膽と薄志弱行の爲めに己れを責めてゐるとはいへ、同時に彼は彼の流した血が、彼をしてその愛する人々とすら以前の如き打解けた精神的の交際を爲すことの出来ないものにしたと言ふことを無意識的に感じてゐる。「私はまるで千里の外から貴方が

たを見てゐるやうです。」と彼は母や妹に言つてゐる。斯様にして偉大なる藝術家は、人心に固有なる永久的法則を犯す結果は、必ず外部からでなく内部からの罰を招くものであるといふことを明示してゐる。即ちラスコーリニコフは、他人との悲しい隔離や寂しい獨居や又は自分の生活が何ものかの爲に傷けられ破壊されたといふ臃ろ氣な意識によつて、自分自身を罰してゐるのだ。然し彼は一切の原因を自分の薄弱な意志に歸して、何事も自分が脆い無氣力な天性を賦與されてゐるからだと決めてゐる。さうして彼は自分の主義の前に屈服したところから、其の主義よりも自分が低いやうに思はれてならぬ。「俺は自分自身を殺したので、老婆を殺したのぢやない」と彼は言つてゐる。同じ意味を更に他の場所では「老婆などは何でもない！俺は人を殺したのでなく、主義を殺したのだ。」と言つてゐる。

更に進んで作者はその主人公を、內的錯亂と心的戰鬥の方面から描いてゐる。即ちラスコーリニコフは全然、生活の内容を失つて了つたのである。つまり生活の基礎が消滅したのだ。で、彼は以前のやうな生活の興味と言ふものを全く見出さない。此の上もはや勞働にも娛樂にも身を委ねることが出来ない。さうして唯二つの決心の間に戦つてゐる。即ち強者の權利を主張する以前の己が決心に立返るか、それとも彼を懺悔と救ひと呼んでゐるソーニャの決心に従ふべきか、こ

の二途の選擇に迷ふてゐる。然し作者が示した主人公の性格は、ソーニャの感化によつて行はれたラスコーリニコフの精神的更新の過程が如何に緩漫であるかを證明してゐる。

六

ラスコーリニコフの親友ラズウミヒンが彼の性格を説明した言葉に、

「元來が陰氣で、癩癩持で、高慢で、氣位が高い。その上に近頃は——尤も余程以前からその徴候が萌してゐましたが——殊に近頃は妙に猜疑心が強くなつて多少憂鬱ヒゲの氣味があります。根は親切で鷹揚ですが、心に思つたことを顔に出すのが嫌ひで、どんなに腹が立つても決して口に出さないで、いきなり思ひ切つた亂暴まねな所爲ねをする。さうかと思ふと一向憂鬱ヒゲらしくなく、たゞ冷淡、極度の無感覺ぐらゐにしか見えない時もある。要するに二種の性質が存在して代る／＼交代して働くので、或時はひどく無口になつて、何も彼も自分に逆らうやうに見えて、一日床の中にごろ／＼して何にもしないのであることもある。冗談ひとつ悪口ひとつ言はないのは口下手で言へないからぢやない。口を利くのが面倒臭いから黙つてゐるんで、そんな時には人が何を言はうと耳にも入れない。他のものが夢中になつて聞かぬやうなことでも一向平氣で知らん顔をしてゐる。尤も一と口に言へば高くとまつてゐるので、實際また相當の學問見識があるんだから、決して無理はない

と思つてゐますが、何しろこんな風でした。」

然し小説の或る場所に於て讀者は、屈辱と實生活の悲痛とによつて作られたラスコーリニコフの此の冷酷さと高慢の表面を透して時々優しい愛らしい心の閃きを見ることが出来る。さうして此の優しい心は彼をして殊に「虐げられた人々」に同情を注がしめた。彼は不幸なるマルメラードフ（ソーニャの父）と知合になつて、その家族の悲惨な生活状態を聞き取つて彼等の住居を訪ね、自分に取つては命の糧とも頼む最後の金子を恵んでやり、また往來で馬車に轢かれたマルメラードフを抱き起して、いろ／＼彼を介抱してやつた。さうしてそれが爲めラスコーリニコフを抱いて接吻したソーニャの小さな妹の子供らしい喜びの感謝が彼には何より嬉しかった。つまりこれらの印象が、生活の喜ばしい感情を彼の心に注入したのである。で、彼は俄かに湧き立つやうな、充實した、力強い生の新しい限りない感覺に滿された。此の感覺は恰も死刑の宣告を受けた者が不意に赦免の報告に接した時の感覺に似てゐた。で、彼は決然として嚴かな口調で言つた、「もう澤山だ！ 蜃氣樓も恐怖も幻影も悉く去つて了へ！ こゝに生活がある！ 俺は一體今迄生きてゐなかつたのか？」

愛情、憐憫、同情の刹那、人々に對する精神的接近の感、世界同胞の情——かうした感じがラ

スコリーニコフに充實した楽しい生活の感覺を與へた。斯様にしてラスコリーニコフの天性に備はる特質は、彼の理論や學說と全く矛盾してゐる。作者はラスコリーニコフの思想見解が自家獨特であるに拘らず、彼が如何に優しく、感じ易く、さうして人々の苦痛に對して如何に病的に鋭敏な心を持つてゐるかを示してゐる。彼は都會生活の凡ゆる悪夢の爲めに痛く苦しみ、自分に對して子供たちの柔和な信用深い態度を呼び起し、過去に於ては狗糞むじの一少女と戀仲になり、それによつて自分の生活を彩らんとしたこともある。それ故にラスコリーニコフの生涯に於ける此の後の轉化も、彼が個性の斯うした特質によつて充分説明できると思ふ。が、然し作者はたとへ何んな點に於てなりとも一旦正義公道に對して罪を犯した人の精神生活の光景を示すことを欲しなかつた。さうして此轉化をば主人公の內的體驗の自然の流れに放任して只その結果を描いてゐる。

七

主人公の此の精神的轉化に與つて力のあつたものは、ソーニャ・マルメラードワである。貧しい官吏の娘である彼女は、繼母とその子供らを塗炭の苦しみから救ふために賣春婦の生活を送つてゐる。自己の境遇の恐ろしさと汚らはしさと恥しさを意識して始終おづ／＼してゐる彼女は、持つて生れた清い美しい心をどこまでも保ち、特に人々に對する特殊の愛情と燃ゆるが如き宗教

心とに優れてゐた。肉親のためとは言へ、花の如き一生を犠牲にして、此の世の地獄とも言ふべき苦しい汚辱に陥りながら、不平も言はず呟きもせず、黙つて自分の苦痛を忍んでゐる心のしほらしさ。この沈黙の苦痛がやがてラスコリーニコフの心を動かし且つ驚かしたのである。彼はこの娘の心をよく理解してゐる。彼女は彼に取つて恰も全人類の苦痛を一身に具現してゐるやうに思はれた。その頃いろんな苦しい經驗の爲めに心から震蕩されてゐたラスコリーニコフは、一種の感激に打たれて彼女の足下に伏拜してゐる。さうして言ふには、「俺はお前に伏拜したのではない、俺は全人類の苦痛に伏拜したのだ」と。然しソーニャの内面世界はラスコリーニコフのそれとは全然異つてゐる。彼女は強者の權利に關するラスコリーニコフの說を絶対に否定してゐる。彼女に取つて、各個人の生活はそれ／＼その自身に價值のあるもので、その生活に對して彼女は宗教的態度を持してゐるのである。だから彼女は或る人の生活が他の人の爲めに手段となり得ることを許すことが出来ない。彼女は基督の愛の原則を遵奉してゐるところから、ラスコリーニコフを非常に懃いたはつてゐる。何故なら彼は彼女に取つても普通の人を取つても不幸な罪人であるからだ。さうして彼女は彼の身の上を痛く泣き悲みながら、彼に、宗教的生活の最高原則の要求に従ひ、潔く苦痛を受けて罪障を贖ふやうに勤告してゐる。「今直ぐお出かけなさい、さうして十字街に立つ

て伏拜なさい。初めに、貴方の爲めに汚された土地に接吻なさい。それから全世界に、世界の四方に向つて伏拜しなさい。さうして皆さんに向つて大聲に私は殺人者だと仰有いませう。さうしたら神様はまた貴方に生命を返して下さるでせう」と、彼女は説いてゐる。けれどもラスコーリニコフは凡ゆる辛い試みと心の戦闘とを経験してゐるにも拘らず、犯罪に對する彼女の眞面目な態度を解することが出来ない。とう／＼心の調和を得ずに、改悔の念も知らずに彼は徒刑場に行つてゐる。然しラスコーリニコフの陰鬱と高慢とは直ちに囚人らの恨みを買ひ、それに反してソーニヤは彼等に對する優しい同情と親切とによつて、彼等の愛情を惹いてゐる。で、囚人らは彼女の眞情に打たれて、「お前さんはほんとに苦勞を積んだ、俺たちの優しいお母さんだ」と言つてゐる。然しソーニヤの感化は空しからず、ラスコーリニコフは遂に精神的轉化を體驗したのである。けれども此のことに就て、この小説は我々に詳しく語つてゐない、たゞ暗示するだけに止めてゐる。即ち作者は言ふ、「こゝに新しい歴史が始まつてゐる。一個の人間が漸次更新して行く歴史である。彼が漸次生れ變る歴史である。或る世界からだん／＼と他の世界に移つて、今迄全く知られなかつた新しい現實と接近することである」と。

八

この小説の根本觀念はラスコーリニコフによつて代表された狭い、個人的、利己主義的、合理的原理と、ソーニヤ・マルメラードワによつて代表された宗教的、基督教的原理との對立と見ることが出来る。ドストエーフスキイが、人生に於ける粗野暗黒なる肉的原理と神聖光明なる精神的原理と——この二大原理の戦闘を常に熱心に研究しつゝあつたことは、彼の凡ゆる著作を通じて最も顯著なる事實である。けれども鋭敏な藝術家たる作者は、一方からは人々の間に完全にして高尚なる理想の實現を求むるの不可能なることを解して居り、また他方からは世の中に救贖の望みの全く絶え果てた罪人も神性の火花が全く消え失せた人間もゐないと信じてゐる處から、人生に於ける此の二大原理の戦闘を研究することが、つまり多少なりと人を理想に近づかせる手段であると信じてゐる。所が此の理想に達する途上の障碍となるものは嘗に肉の衝動ばかりではない、やはり形式的な論理上の斷案と共に我々の判斷や智性の誤れる推理も障碍になることはラスコーリニコフの例に於いて明白である。ラスコーリニコフは内的更新を経ない前のトルストイの小説の主人公（たとへばピエル・ベズーホフ、アンドレイ・ウォルコンスキイ公爵——『戦争と平和』のやうに、合理主義的傾向の人として現れてゐる。さうしてアンドレイ公爵の如く、一切の人生問題をたゞ狭い個人的見解や目的より、たゞ自分の個人的小世界より割出して解決しようと試

みてゐる。さうしてピエル・ベズーホフの如く全く別な人生觀に到達してゐる。その人生觀の眞髓は、全然自己の個人性を脱して、最高原理を中心に人々を結合せんとする世界的目的の上に立脚することである。斯かる合理主義的的人生觀の代表者としては、同じドストエーフスキイの『カラマゾフ兄弟』の中に強者の權利を主張してゐるイワン・カラマゾフが出てゐる。けれども地上に於いて達し得らるべき理想としては、肉が靈によつて淨化されると言ふ高尚な意味に於いての靈肉一致がある。此の靈肉一致の境地に達した者には同じ『カラマゾフ兄弟』の中にゾシマ長老、アリョーシャ・カラマゾフなどがある。凡て彼等の生活は、福音書の理想たる愛を地上に實現することに献げられてゐる。さうして彼等は、愛の不可思議な力と、また何んなに墮落の極度に達しても人間に固有してゐる精神的向上の力によつて、世界の凡ゆる罪惡と恐怖とは必ず贖はれることが出來ると固く信じて疑はない。此の確信は『罪と罰』の中のマルメラードフの有名な獨語モノログに最も嚴肅に、最も力強く表現されてゐる。そこに愛他主義の福音がある。愛によつて此の暗き世にも光明が點ぜられ、この汚れた人生も淨められる。これがドストエーフスキイの根本の思想である。

二、『白痴』の研究

『白痴』は、作者が外國滯在中、非常な窮迫の中で書いたもので、一八六八年イタリーのフロレンスで脱稿してゐる。ドストエーフスキイの傑作の中でも特に美の悲劇と言はれ、美の魔力と救ひの眞實との悲劇的戰鬪を描いた作である。此の作はその性質に於いてドストエーフスキイの他の作と變つたことはない。同じ癡狂院の恐るべき心理、同じく緊張した騒々しい對話の異常な力と、道徳および美の世界に於ける驚くべき發見とが描かれてゐる。

この小説は何らの結構も持つてゐないと云ふことが出来る。作者は、人間心理の描寫に於ける寫實的眞實に就ては、殆んど考慮してゐない。彼は混沌たる精神の根本を描いてゐる。しかもそれを意識的に氣狂じみた特質を以て描いてゐる。何故ならさう言ふ描寫によつてのみ初めて見ゆる世界の謎、美の謎、及びその美によつて誘惑される慾望の謎を描き出すことが出来るからである。此の作には幾多の根本的矛盾が取扱はれてゐる。例へば神と惡魔、世界的根原と個人的根

原、超感覺的眞實と感覺的の美、かうした矛盾が衝突する場合、この衝突から大きな混亂が起り、大きな思想上の嵐が起る。そして作中の人物は、皆この嵐に捉はれて、永久に癡癡的に疾驅してゐる。それらの人物は一人も一ヶ所にちつと止まつてゐることが出来ない。山の上に駆け上つたかと思ふと、谷底へ駆け下りる。倒れたかと思ふとまた起き上ると言ふ風で、中には山の絶頂を極めて夢我夢中にもがいてゐるものもある。これは豫言者の病的天才が或る發作の瞬間に於いて人間の歴史的過程を徹底的に體驗した結果でなければならぬ。

二

『白痴』の中心事件は、女主人公ナスターシャ・フィリッポヴナの周圍に集中してゐる。この女性にはロシア文學に於ける眞の悲劇的人物である。この人物の創造には愛と憎悪と言ふ人間生活の二つの眞實が非常な魅力を以て働いてゐることは、疑ひを容れない、このロシア式の美が自己の周圍に盲目的な情熱の炎を焚きつけながら益々發展して行くのを見て、我々は作者の魔力的創造力に驚かざるを得ない。我々は最初ナスターシャを、直接でなくムイシュキン公爵の眼を通して寫眞によつて知るのである。作者はナスターシャの寫眞姿に就いて書いてゐる。

「彼女は極めて質素な、併し優美な流行型の黒い絹の着物を着て撮られてゐた。黒亚麻色に見える髪の毛は、質素に家庭的に飾られてあつた。瞳は黒目勝ちで深みがあり、額は物思ひに沈んでゐる。顔の表情は情熱的で、どこか高慢なところがある。」これらの言葉から我々は既に人を波立たせるやうな美の印象を受けるのである。ムイシュキンは寫眞を見て、この顔が快樂にも深い苦痛にも陥り易い女の顔であることを感ずる。

たゞに外面の美ばかりでなく、ナスターシャの顔の中には何物かあつて、それが敏感なムイシュキンに働いてゐる。作言は言ふ、「この顔には非常な傲慢と殆んど妬嫉に近い侮蔑とがあつた。同時に、信じ易い驚くべき率直な何ものかがある。」つまり傲慢な侮蔑的な美を通して、信じ易い優しい心が閃いてゐる。この二つの矛盾の結合が謎の女ナスターシャである。他の人々は單に此の女の美に迷ふて近づいて行くのであるが、ムイシュキンは全精神を以てこの女を抱擁してゐる。ドストエーフスキイは言ふ、「この二つのコントラストは、その特性を見る時に於て一種の同情さへ起さしめた。この輝かしい美は堪えられないほどであつた。蒼白い顔、殆んど肉の落ちかゝつた頬、燃えてゐる眼——異様な美であつた。」即ち疲れた蒼白い悪魔と惱める天使と、この二つの矛盾した力のコントラストはナスターシャの全生命であり、彼女の發作と苦痛と無知と共に彼女の一生である。

我々は、この小説を解剖して行くうちに、至るところに於いて、ナスターシャの性格に於けるこの二重性、二つの大きな力の矛盾に行き當る。彼女の美は人々に對する彼女の悪魔的な魅力である。その美は、他人を亡ぼし、彼女自身をも貪慾な情熱の深淵に引き入れてゐる。然し彼女の涙、彼女のムイシュキンに對する強い執着は、彼女の生活を救ふところの要素である。が、その救ひは彼女に於ては實現されなかつた。彼女には二つの趣味、二つの強い流れがある。遊蕩に對する抑え難い傾向と靜かな悲哀、辱められた幻想的な女の傲慢と小さな貧しい謙遜な人々に對する信服、かういふ二つの矛盾した傾向がある。彼女は放埒でもあるが慈悲心もある。彼女は無邪氣な天性から來る愉快なおどけた笑ひ方をするかと思ふと、また相手に冷汗をかゝせるやうな意地悪い毒しい笑ひ方をすることもある。公爵は獨語してゐる、「彼女の顔は單に情熱だけを暗示してゐるのではない。彼女の顔は苦痛を暗示してゐる。それが我々の全精神を捉える」と。小説中の他の人物は、彼女の美を「幻想的な悪魔的な美」と名づけてゐる。その根底に於て美しいナスターシャの精神は、一種の魔力によつて意地悪い魅惑的な形を被せられてゐる。それ故に彼女は、敏感な人々に二重の働きを喚起する。そしてこの二重の働きは、これらの人々に悲劇的な不調和を與へる。ムイシュキンはラゴージンに向つて言ふ、「私は彼女を愛情によつてではなく、憐憫によつて

愛する」と。つまりムイシュキンは、彼女に於いて二重性格の苦しい戦ひを見てゐる。そしてこの戦ひの苦痛が、彼の理解ある同情を惹いてゐるのである。けれどもこれはまだ、彼女がムイシュキンの内に喚起してゐるところの凡てではない。ムイシュキンは、ラゴージンに言つた自分の言葉を思ひ出しながら、それが彼女と自分との關係に就いて凡ての眞實を言つたのでないと感じてゐる。彼が彼女に對して抱いてゐる感情は、單に憐憫の情ばかりではない。憐憫は彼の精神に於いては、彼がその癲癇發作の時に往來する超感覺的世界の反響の如く現はれてゐるに過ぎない。然し彼の心の純人間的なところは、たとへその溶けかゝつた個性のうちに限られてゐるとは言へ、彼女の強い個性と接觸する毎に、彼女の悪魔的傲慢や彼女の悪魔的美と接觸する毎に、生きた神経を震はしてゐる。作者は言ふ、「今、彼女が不意に現はれた此の瞬間に、彼は、ラゴージンに言つた自分の言葉の中に言ひ足りなかつたものを直覺によつて悟つた。つまり恐怖を表明することが出来るやうな言葉が足りなかつたのだ」と。凡て高尚なる人に及ぼす強い美の働きは、その様なものである。何故ならば、美はその人の個人的力を緊張せしめつゝ、それらの力を謂はゆる背神的の暴慢に向けるからである。然し高尚なる人は、自分自身のうちに此の不調和を見る時に、戦慄せざるを得ない。何故なれば、その様な不調和に於いて、その人は深い自

己感覺によつて自分に取つての偉大なる悲劇に達するからである。自己の精神力に取ての偉大な試練に達するからである。マイシュキンは他の所で言つてゐる、「あなたは御存じないのです。私は此の事を誰にも話しませんでした。アグライヤにすら。けれども私はナスターシヤ・フィリップヅナの顔を見るのが堪えられません……。私は彼女の顔がこわいのです」と。マイシュキンはナスターシヤから受けた印象は、彼女自身の如くやはり二重になつてゐる。二様の印象を受けてゐる。

三

ドストエーフスキイの描寫は、最初は單に暗示を投ずるだけで、讀者に何となく不安な心持を起させるが、讀んで行くうちにその神祕的な暗示が段々はつきりして來て理解されるやうになる。マイシュキンはナスターシヤとは最初の會見の時から、何だかお互ひにどこかで見たやうな氣がしてならぬ。かつて一度も會つたことがないのに、お互ひに知り合ひであるやうな心持がする。惡魔的ナスターシヤは、もう長い間、彼女の精神の惱めるエンゼルに最も近い人を探してゐた。彼女は、誰か彼女の所に来て、彼女を理解し、彼女の罪を許し、彼女を純潔な愛で抱擁するやうな人のことを空想してゐた。彼女は、自分がこれまで過して來た惡夢のやうな歡樂に浸つた生活のうち、さういふ人物を夢みてゐた。すると突然マイシュキンに於いて、彼女は長い間夢みてゐたそ

の人物、その精神を感じたのである。マイシュキンの光明なる天性を反映したその顔の特徴は、彼女に取つて古い馴染のやうに思はれた。彼女の夢は現實となつて現はれ、現實は彼女の心の秘密な夢と一致した。そしてマイシュキンは疾うからその癡癡状態に於て、人間の精神的分裂の偉大な苦痛を體驗してゐた。それ故にナスターシヤの火のやうな惱ましい眼は、一種の見慣れたやうな眼差でマイシュキンを眺めたのである。斯様にして、最初はその不明瞭な爲めに讀者に不安を起させるドストエーフスキイの暗示は、次第にその思想的及び心理的内容を展開して來るのである。

ナスターシヤに於ける此の二つの要素の矛盾、大きな無意識的な力の深刻な矛盾は彼女のうちに心理的旋風を呼び起し、それが彼女を發狂させる。マイシュキンは彼女に向つて自分の妻となつて呉れと申し込んだその時から、彼女は俄かに此の旋風の中に捲込まれて了つた。一方には猛烈な情熱を持つたラゴージンがあり、この男に對して彼女は、その天性の惡魔的部分を以て共鳴してゐる。他方には、靜かな白痴のエンゼルとも云ふべきマイシュキンがあつて、彼女のうちに彼女の有する靈妙な絃を動かしてゐる。この瞬間からナスターシヤは半狂亂になつたのである。最後にラゴージンと一緒に逃げ去るまでの彼女の内的戰闘、精神的錯亂の場面は、偉大なる藝術的感激に充ちてゐる。この場面に於てナスターシヤは、地上の美の生ける權化のやうに見える。その美

の中には、滅亡の深淵と一緒に無意識的な精神的要素の静かな不平も聞える。彼女が最後に全く發狂して癡癡状態に陥りながら、別な道德的可能性に對する最後の望みを絶つて了つた時に云つた言葉がある、「ラゴージン、進め！ 左様なら公爵、わたし初めて人間を見ましたわ」——この言葉のうちにも二重の光が輝いてゐる。心のうちにはこのまことの人間の幸福な姿を思ひ浮べ、口には冷笑を浮べ、まつ毛には涙を震はしてゐる。この小説は惡魔的美と惡魔的情熱とに富んでゐると同時に、一種の抑制された、而も絶間ない號泣と傲哭とによつて貫かれてゐる。

ナスターシャに於いて今一つ認めなければならぬ性格は、その傲慢と共に謙遜な性質である。彼女は常に自己譴責と自己懺悔に悩まされてゐる。純潔な身をトーツキイに汚されたのを苦に病んで、衷心より公爵を愛してゐながら愈々の時に臨んで彼から逃げ出す。つまり純潔なムイシュキンと一緒になつて自分ゆゑに彼を汚すことを恐れたのである。かう云ふ性格はロシア人獨特のもので、そこにロシア人の美がある。惡魔は時としてロシア人を征服してロシア人の心に火を焚きつけようとするが、それを焼き盡すことが出来ない。ロシア人の性質には、惡魔的要素と共に神的要素があるからである。ロシア人の傲慢な性質のうちには一種の救贖的な謙遜の心が働いてゐる。その傲慢が増長すればするほど、自己譴責、謙遜も深くなるのだ。

四

ムイシュキンは本篇の主人公で、理想的性格の人物である。現實の人間を描いたものでなく、人間の理想を描いたのである。その神祕的天性に於いて、人間生活の上に最高眞實の光を投ずるその任務に於いて彼は人間の理想である。彼の肉體は彼の精神に取つては地獄でしかない。彼の精神には一切のものが無限に包容されてゐて、如何なる肉體の中にも收容し切れないのである。

彼の空色の眼は無邪氣を表はし、彼が肉體的欲求を持つてゐないことを語つてゐる。その不思議な表情に満ちた静かな重々しい眼光是、世間離れのした彼の精神の調子を傳へてゐる。その精神は何時も熱心に非常な注意を以て人間生活の中に入つて行き、人々の間の利害關係の複雑な問題を解くべき宗教的使命を有し、至るところに非劇を發見し、凡ての人の爲めに更新の道を見出してゐる。彼は何でも觸れる限りのものを神人化してゐる。

ムイシュキンの聲は全篇を通じて靜かに、平和に、人々を融和させるやうに響く。これは彼の全人類性格に相應してゐる。何故なら彼は、人々の生活を深めながら人々を最高の調和に導く使命をもつてゐるからである。

ムイシュキンはその不思議なデリケートな微笑で人々を魅惑してゐる。彼の輝かしい微笑の中に

は何らの隠れた不快な感じがない。無論、人々を辱かしめるやうな悪魔的な煽動的な何ものもない。その小さな微笑のうちには、大きな神の正義が體現されてゐた。人々は皆無差別に彼に惹きつけられてゐる。或者は彼に於いて自分の良心を見出すために、また或者は彼を自分の不義な生活の生ける譴責者として、彼に接して自ら苦しまんが爲めに、彼に接近してゐる。汽車の中で彼と偶然知合になつたばかりのラゴージンは、彼に向つて、「公爵、俺はどうして君を愛するやうになつたか分らない」と言つてゐる。

かうして、ラゴージンも、エパンチン將軍の家僕も、將軍自身も、ナスターシャ・フィリツポヴナも、肺病患者のイッポリトも、その他の人物もみな本能的に、ムイシュキン公爵の世界的・人類的精神に惹きつけられる。凡ての人が彼の包容的精神のうちに融け合つてゐる。人が肉體の眼で世界を眺める時、その人は至る處に差別と相違を認める。けれども、精神の眼で、宗教的歡喜を透して觀る時には、世界的形式、世界的現象の一致を捕捉することが出来る。凡てのものが、それ自身の輪廓を失ふことなしによく調和を保ち、共通の理想をもつて貫かれ、創造の根原に對する共通の傾向によつて貫かれてゐる。斯様に、自己の感情と理智とを以て、一つの調和した深い人類綜合のうちに色々の現象を包容することに於いて、ムイシュキンと世界との内的關係が現は

れてゐる。彼は何ものに近づいてもまた何人に接しても、至るところに恐るべき深淵を發見してゐる。その際ドストエーフスキイはムイシュキンの人物に寫實的性質を附して、人々との接觸に當つて彼自身の受けた直接の印象を我々に傳えてゐる。その際、彼は普通の感情を備えた普通の人としか我々には思はれない。けれども暫くすると、彼は再び地上の蔽ひを脱して、エンゼルの如く、高尚な抽象的理想が假りに人の姿を取て現はれたやうに思はれる。ムイシュキンが、ナスターシャや、アグライヤや、ラゴージンや、その他の人物に對する關係に於いて、我々はそれを認めることが出来る。

ムイシュキンは、ラゴージンとは性格や氣分が全く異つてゐるにも拘らず、彼を愛し、お互ひに十字架を交換した。この小説全篇を通じて、ムイシュキンは、自分の心の輝かしい光明によつてラゴージンの内部に燃えてゐる破壊的な情熱の火を、打ち消さうと努めてゐる。ムイシュキンは、ラゴージンの狂暴なる欲求を通して、彼の心の中に自分と共通した高尚な眞面目な何ものかを見てゐる。嫉妬に燃えたラゴージンが彼の頭上に白刃を閃めかした時、ムイシュキンはたゞ「パルフェン、僕には信じられないよ」と叫んで、癲癩のけいれんに陥つた。彼は現に眼前に見た事實を信じる事が出来なかつた。ラゴージンの今の行爲を、人間の根本的な不變な性質から出たもので

なく、たゞほんの偶然の行爲として、本當の事實とは思はなかつた。小説の結末は、ムイシュキン
の悲しさうな、同時に人を感めるやうな姿を描いた感動的な情景で終つてゐる。この時すでに白
痴に陥つてゐたムイシュキンは、同じく熱病患者のやうに讒言に陥つてゐるラゴージンの傍に坐
つて、自分の震へる手で彼の髪の毛や頬のあたりを靜かに愛想よく撫でゝゐる。

一つの白痴状態から次の白痴状態に至るまでのムイシュキンは、たゞに廣く見開いた眼で生きて
ゐるばかりでなく、内面的觀照（靜觀）の恐ろしい力を以て生きてゐる。彼は誰も見ないものを
見てゐる。他の人が暗黒と壓迫とのほか何物も見ることの出来ないところに、彼は限りない生活
を見てゐる。こゝに彼の天才があり、また病氣がある。それは普通の人間の天性を超越した異常
な精神の緊張である。彼は「牢獄の中に偉大なる生活を發見することが出来る」と言つてゐる。

これは、強制的孤獨との調和を云つたのでなく、寧ろ自由な人間の心の翼を束縛するやうな暴虐
はどこにも有り得ないと云ふことを言はふとしたのである。緊張せる思想に取つては空間や時間
の制限はない。ドストエーフスキイ自身の凡ゆる悲劇的經驗を自身の中に體驗してゐるムイシュキ
ンは、何びとも捕捉することの出来ない二つの世界の接觸點を見てゐる。が、彼の異常なる精神
の活動は、この接觸點にも満足しない。更にこの接觸點を越えて遠く進んでゐる。そして、科學

も哲學も見ることが出来ないものを、一と異常な直觀によつてのみ捕捉することが出来るものを
見てゐる。かくして彼は、その鋭敏な精神的視力によつて、無形の世界を透視してゐる。それは
もう、この見ゆる世界の彼方にあつて、如何なる言葉をもつてしても、如何なる概念を以てして
も、また如何なる形容を以てしても語ることに出来ない世界である。

五

ラゴージンに於いて先づ第一に感じられる點は、その非凡な性格である。彼の笑ひは、傲慢で、
嘲笑的で、意地悪く、それが周囲の社會に對する彼の批評の表明であるやうに思はれる。その傲慢
は、ラゴージンの無意識的な、しかも大膽な、あけつびろげた尊大の現れである。そして此の嘲
笑と意地悪さは、世の中の下らない利己主義的な些事に對する彼の嫌惡の情を語るものであり、
また彼の惡魔的な情熱の發作を示すものである。彼は小説の最初からナスターシャに對する惡魔
的な情熱の囚となつてゐる。この情熱は彼の外貌にまでその刻印を捺してゐる。またこの情熱の
ために彼は苦悶してゐる。従つて此の情熱は彼の生涯の大きな事件である。事實ナスターシャに
對する彼の惡魔的な戀愛は、小説の終りに至るまで彼の心を燃焼させてゐる。しかも彼の意地悪
い傲慢な發作的な、そして深刻な表情は、いつも變りなく彼の集中的な氣分を示してゐる。ラゴ

ージンが現はれて來るところでは必ずドストエーフスキイは、彼の緊張した内面生活の同じ特徴を示してゐる。その際ラゴージンは、いつも恐ろしく黙り込んでゐる。

元來單純な性質を有し、野人の性格を帯びたラゴージンは、自然とナスターシヤの悲劇的物語に於けるヒーローとなつてゐる。斯くして彼の悪魔とナスターシヤの悪魔とが出遇して、悲劇はその極度の深さにまで達してゐる。それ故に兩人に於いて、神の性は狂暴なる情熱の下に苦しんでゐる。ナスターシヤの心に於いて悪魔の性と神の性とが如何に戦つたかは、既に述べた通りである。彼女は自分の苦痛を隠すことが出来ない。純粹の女らしい發作と共に絶えず泣き悲しみ、また絶望と自己譴責との叫びを擧げてゐる。けれどもラゴージンは黙つてゐる。神の性はどこか彼の心の奥底に於いて彼を悩ましてゐる。けれども二つの性の戦ひは彼に於て完全な發展を遂げなかつた。従つて彼の注意を惹かなかつた。それは別な悪魔が、即ちナスターシヤの悪魔的な美が彼を魅惑して了つたからである。ラゴージンは非常な智力の所有者であつたが、その智力は彼の精神生活には殆んど與^{あつ}る處がなかつたやうである。彼は盲目的に無批判的に愛してゐる。何ら顧慮することなしにひたすらに、肉的な野生の情慾だけで愛してゐる。従つてナスターシヤに對する彼の戀愛は、すべて破壊的な執念の性質を帯びてゐる。彼は自分の心に、ナスターシヤの悪魔的な美の

みを受け入れた。そして此の美は、彼の悪魔的な力に對して血戦を挑んだのである。斯う云ふ戦ひは、ラゴージンのやうに一切の冒險を恐れない馭し難い性格の人に於いては、當然、死に到るものでなければならぬ。マイシュキンはラゴージンと交際を初めたばかりの時に、早くも、「もし彼がナスターシヤと結婚したら恐らく一週間の後には彼女を殺して了ふだらう」と云つてゐる。マイシュキンはその明るい精神の眼を以て、彼の情熱の到達すべき終局を豫見してゐたのである。

六

多くの純な人に見るやうに、ラゴージンのナスターシヤに對する戀はほんの一瞥から始つてゐる。彼はネヅ街を横ぎりながら、彼女が商店から出て馬車に乗るところをチラと見たのである。その瞬間彼女は、ラゴージンの心まで焼き盡して了つた。ほんの一瞬間ではあるが、もうこゝに悪魔と悪魔とは出遇はして掴み合ひを初めたのである。その晩ラゴージンは、ナスターシヤを見る爲めに劇場に出かけてゐる。彼はその夜は一睡もせず、翌朝になつて父の金を取り出して一對の高價なダイヤモンドの耳飾りを買つた。彼の心中には、誘惑的な悪魔的な幻想が働き出した。彼は自分の心の中からは彼女に何の寶も與へることは出来ないが、然し彼女の心を誘惑するために天から星を奪ふことさへ敢て辭さないであらう。けれども彼は、買つた耳飾りを持つてひとり

で彼女の所へ行く決心がつかない。自分の名で耳飾りを彼女に献げる勇氣が出ない。最初から、ナスターシヤの悪魔は彼の悪魔よりも強いやうに思はれた。平生傲慢な尊大なラゴージンも、彼女の前に出ると怖氣づいてソワ／＼してゐる。ナスターシヤは彼の贈物を受け取つて、お客を残したまゝ女王のやうな威厳をもつて立ち去つた。あとでラゴージンは、「なぜ私は、あの時あゝの場で死ななかつたのか？」と云つてゐる。此の時から彼の戀は、恐ろしい苦痛に變じてゐる。

一方ナスターシヤは、ラゴージンの贈物が何うして爲されたかと云ふ顛末を詳しく聞いて、彼の愛情の力を評價した。つまり彼が父の激怒をも恐れずに自分の最初の贈物を彼女に贈つて呉れた、その勇氣に感心したのである。二人は最初からもう互ひに結び合つてゐるやうな、また同時に敵同志のやうな關係に立つた。ラゴージンは頻りに彼女を征服しようとしてゐるが、彼の情熱の悪魔は到底完全な勝利の覺束ないことを感じてゐる。ラゴージンはその緊張した努力に疲れてしまつた。彼の戀愛は荒々しい嫉妬にまで熱してゐる。彼の愛は殆んど憎惡に過ぎない。それは、彼の重苦しい天性が純人間的な優しみと云ふものを受け入れることが出来ないからである。彼が或る用件で暫くペテルブルグにゐなかつた間に、ナスターシヤがガーニヤの所に來てゐるのを見て、彼の顔は蒼白くなり、唇は眞つ青に褪せたほどである。彼は愛する女と遇つても一向喜びを感じ

ない。たゞ情熱の痙攣を感じるだけである。その中には何らの明るい心の動揺すら認められない。彼は、ガーニヤの所でナスターシヤの仲間の中にムイシキン公爵を見出して、「どうしたんだ、公爵！ 君もこゝにゐたのか！ あ、あ！」と歎息を發してゐる。併しこの歎息はムイシキンに對して發せられたものではない。彼は公爵のことは早くも頭から忘れて、ナスターシヤに視線を向け直しながら、まるで磁石にでも吸ひ込まれるやうに彼女に惹き付けられつゝ歎息したのである。彼の注意は、他の人と話してゐる時でさへ、彼女にのみ集中し盡されてゐる。斯様に何時も彼女に惹きつけられてゐるラゴージンは、もはや精神の自由を失つてゐるのだ。彼女と力不相應の戦ひを交へながらも、彼は自分に對する彼女の運命的な威力を感じてゐる。自分の無氣力と失望とを感じてゐる。そして彼女を恰も神のやうに見ようとするけれども此の神は柔順でなかつた。天より覗く輝かしい神ではなかつた。それは地上の神であり、悪魔的の我儘な神であつた。或晩ラゴージンはナスターシヤの處に來て、携へ來つた十萬ルーブリをもつて彼女を底抜けの饗宴に誘はふとしたが、彼女を見ると再び蒼ざめてやゝためらつてゐる。やがて彼は新聞紙に包んだ紙幣束きつたばをテーブルの上に置いて、ナスターシヤの勧めるまゝに暫く腰を掛けたが、すぐまた椅子から立ち上つて、絶えず緊張した不安な心持に驅られながら佇んでゐる。そのうちにナスターシヤが、彼

と一緒に行くことを承諾するや、彼は歡喜の餘り叫んだ、「さあ行かう、おい皆の者……酒だ！この瞬間彼は、自分と彼女とをあたりの世界から切り離されたものと考へる。そして何とかして今まで待ち焦れた獲物を、自分の飽くことなき情熱の中に捕へようとしてゐる。一刹那のうちに彼の前には、惡魔的な歡樂の世界が開かれた。ナスタシーヤは近頃まで、彼女を屢々はづかした周囲の人々に對する復讐の念から、尙ほ一層ラゴージンの惡魔的な歡喜を焚きつけた。十萬ルーブルの紙幣束は彼女の手によつてストロブに投げ込まれた。彼女は自分の許婚のガーニャに此の紙幣束を裸かの手で火中から取り出させて彼を辱しめようとしたのである。皆が騒いでゐるうちに、ラゴージンは、たゞちつとナスタシーヤに見惚れて、まるで酔ひでもしたかのやうに彼女から一歩も離れようとしなかつた。彼と共にナスタシーヤも、或る惡魔的歡喜の絶頂にあつた。愚劣な人に對する彼女の輕蔑、哀れな貪慾なガーニャを侮辱し蹂躪してやらうと云ふ彼女の意圖、其の爲めに紙幣束を火中に投じた彼女の鷹揚な態度、それらの中には本當の美がある。凡てを魅惑し、凡てを征服する地上の力がある。それはその瞬間、人間の心の圓滿と完全とを現はしてゐるやうにさへ見える。然しこの瞬間が過ぎると、二つの惡魔の協調は直ちに破れて、新たに殘忍な戦ひが替らねばならない。惡魔の力と云ふものは、決して何時までも調和を保ち得るものではないか

らである。彼等は各々自己の勝利のみを求めてゐるからである。唯一の神の性を離れた彼等は、もはや或る完きものゝ中に自分達の力を融和させる事が出来ない。さう云ふ融和の爲には自己の個人的力の一部を犠牲にしなければならぬのであるが、彼等にはそれが出来ないからである。

實際この時から、ナスタシーヤに對するラゴージンの戀は嫉妬に變じてゐる。彼女の我儘な性格と、彼女を自由に支配する事が出来ないといふ事が、ラゴージンの情熱に落着きを與へない。小説は走馬燈のやうに駈けてゐるが、もはや最後の慘憺たる終局が感じられる。ラゴージンの手に持つ短刀が我々の想像に浮んで來る。彼の心には、その炎々たる嫉妬の發作を柔げるやうな何ももない。彼はムイシユキンに向つて、ナスタシーヤに對する自分の感情と彼の感情とを比較しながら云つてゐる、「俺には彼女に對してそんな憐憫の情などは少しもない」と。彼は自分に對するナスタシーヤの感情が寧ろ憎惡に類したものである事を知つてゐる。また絶えず結んでは離れて行く二人の關係が、何によつて繋がれてゐるか云ふことも知つてゐる。つまり二人は互ひに自分々々の強い、しかも低級な衝動を以て接してゐると云ふことも分つてゐる。ナスタシーヤの惡魔的な美はラゴージンの低級な本能を刺戟しながら、彼女自身のうちにも疲れ切つた情熱の憤怒を起してゐる。二人は、永久絶え間なき戦ひの發作に於いて、常にお互ひに苦しめ合つてゐるのだ。

その場合でもラゴージンは、彼女が自分よりも優越してゐると云ふ意識を忘れない。彼女の魔性の美に對しては崇拜することを止めない。彼は凡ての苦痛をどん底まで嘗めなければならなかつた。そしてその苦痛は、彼女の美と彼女の尊大とに對して彼を無力ならしめるところの歡喜と關聯するものだ。この相互の苦痛に就いてラゴージンが語るのを聞いた後、ムイシュキンは、結局ラゴージンがナスタシーヤを殺すことになるであらう、そして彼の愛に惹かれたナスタシーヤは自ら運命的に彼の刃を迎へるだらうと確言してゐる。「世間にはそのやうな戀を求めてゐる人もあると聞いた」と彼は云つてゐる。此の言葉によつて、彼は、情熱的性格の人々が陥る情熱の悲劇の眞理を表明してゐるのである。斯くして、精神的力の平衡を失つてたゞ自分自身に放任されたナスタシーヤは、知らず／＼自己の破滅へと突つ走つてゐる。恰も岩から離れた石のやうに、彼女は深淵に向つて進んでゐるのだ。彼女は無意識的に戦ひを求めてゐるが、彼女の惡魔的な傲慢の情は死をもつて解決される外はなかつた。彼女の運命は、彼女の我儘な性質によつて決定されてゐるやうに見える。けれども生活の現實は、その神祕的な抵抗し難い法則をもつて、彼女を高尙な目的に指導してゐる。それ故に彼女は最後に、ラゴージンの復讐的情熱の犠牲となつて、その惡魔的な傲慢を償はんが爲めには、自分の惡魔的な破壊力を極度まで嘗め盡したのである。

ナスタシーヤは、ラゴージンが自分を殺す準備をしてゐることを疑はなかつた。彼女はアグライヤへの手紙に書いてゐる、「私はあの人の箱の中に剃刀が隠されてゐることを信じてゐます……私は恐怖の餘りあの人を殺すかも知れません。だけどあの方はその前に私を殺すでせう」と。

七

小説には殺害の光景は描かれてゐないが、ラゴージンの言葉の端に現はれた、ちよつとした話しによつて、我々は次のやうに想像することが出来る。

ナスタシーヤはムイシュキンと離れてラゴージンと手を握つた。婚禮の晴衣を着ながらも半狂亂となつて、棄てゝ來たムイシュキンのことを思つては讒言を口ばしる。寢臺に横はりつゝ苦しみのペテルブルグから遠くへ出發する空想を描いて自ら慰めてゐるのだ。ラゴージンはムイシュキンからナスタシーヤを奪つたけれども、彼女を支配することが出来なかつた。また不可抗的な嫉妬から脱出することも出来なかつた。恐らく、彼女を自分の薄暗い陰鬱な家に連れて來た現在に於いて、これ迄より以上に彼女と彼との間には隔りができてゐるのかも知れない。これ迄のところでは、彼女が彼から離れてムイシュキンに移り、ムイシュキンから離れて彼に移るその二重の關係に於いて、彼は時々彼女を自分のものと感ずることもあつた。彼女が自分に惹きつけられてゐると感

じることであつた。ところが、彼女が永久に彼の手に入つた今、彼女は其の氣持に於ても考へに於いてもラゴージンから遠退とほいてゐる。彼女の沈黙、睡眠、呼吸は、却つて彼の心に恐るべき苦痛を焚きつけた。彼はのぼせ上つて、とう／＼あけがた曉方に到り、箱の中から豫て用意のナイフを取り出し一刺ひとさしにナスターシヤの心臓を刺した。「半さ、じほどの血が襦袢に染つて、たゞそれつきりだつた」と、彼はムイシュキンに語つてゐる。ナスターシヤの美はこの最後の悲劇的瞬間にすら苦しまなかつた。我々の前には血の塊りの中に漂ふてゐる大理石像の如きものが目に映じる、彼女だ。今や彼女の悪魔的な情熱は消えて、彼女の顔はたゞ天上の靜かさのみを表はしてゐる。ラゴージンのナイフは彼女の内生活の葛藤を解決して、彼女に取つては唯一の可能であつた平安をもたらしたのである。

ナスターシヤの死は、ラゴージンの情熱の苦痛に終りを告げしめた。この後に於いて裁判と懲役のため根本的に變じられるであらう彼の生活には、彼の精神の別の力が展開するだらうと思はれる。その力は、小説を通じて既に我々に感じられてゐたが、たゞ彼の情熱のために壓倒されてゐたのである。それは、何人も彼に認め得るところの、醒めた現實的の智力と、信仰の要求とである。

ラゴージンの如き性質の人に於いては、これらの力も、やはり極度まで發展することが可能である。彼の今後の深い苦痛の生活に現はれるべき此の新しい明るい線は今のところ認められぬけれども、然しそれは、彼がこれ迄體驗した苦痛と試練の結果として必然的に現はれて來ねばならぬものである。裁判に於ける彼の率直な、正確な、満足な供述は、既に新らしい心境にある彼の嚴肅な沈痛な精神を示してゐる。彼の智力と信仰への要求とは、社會が彼に正當な裁きを下した後の彼の新生活に於いて、充分の發展を見ることが想像される。

然しこれまでは、彼の大なる智力と深い信仰への要求とは、離れ／＼に働いてゐた。彼は神を求めてゐる。情熱の嵐の靜まるほんの僅かな瞬間に於いて、知らず／＼のうちに神を求めてゐる。たゞ醒めた智力と若い無知な感情とが、宗教の軌道から彼を押し除けてゐたのである。然し最も荒々しい發作の瞬間、何ものか彼の心に動いてゐる、彼の悪魔に反抗してゐる。彼は已れと戦つてゐるのだ。例へばムイシュキンの生命に危害を與へない爲に、ラゴージンはムイシュキンと兄弟の契りをなし、十字架を交換し、母親の祝福を受けに相携へて行つた。これこそロシア國民の信仰である。

二人がナスターシヤの死骸の傍で送つた一夜のことを描いた最後の場面は、藝術的に見ても心

理的關係から見ても眞に驚嘆すべきものである。

ラゴージンは二つの長椅子から枕を取つて、それをナスターシヤの傍の床の上に二つ並べて置いた。「かうして彼女は今我々の傍に、僕と君との傍に寝てゐるのだ」とラゴージンは言つた。今や彼は全身やさしい感情に満されてゐるのだ。彼女は今、最後の癲癇の發作に近づきつゝ震えてゐる。ムイシュキン公爵に近寄つて、優しく嬉しげに彼の手を取り、寢臺のところに連れて行つて、左側の良い枕の方に寝かせた。ムイシュキンがラゴージンのうちに感じてゐた廣やかな感情が、今の瞬間に發現したのである。ラゴージンが世人の無慈悲なる裁きにかけられる前の、この恐ろしい一夜を、二人並んで、新たに温められた純な相互の友愛のうちに送つてゐる。光景は眞に感動に値する。斯くしてラゴージンの心は、光明を得て救はれることになるのである。

三、『惡靈』の研究

一

『惡靈』(一八七一年)はドストエーフスキイの作品の中でも特に獨創的である。一寸見ると、この作は年代記か何かのやうに思はれる。或る都會でその頃起つた或る奇怪な事件の公平な記述のやうに思はれる。實際小説の大部分は年代記の精神で書かれてゐる。凡ての事件がどんな秘密な内輪の事までも、或る見えない年代記者によつて傳へられてゐる。然し第二編の終り頃になると、この年代記者は姿を消して作者自身が登場する。それは、何處までも公平無私であるべき筈の年代記者が客觀性を失つて、毒々しい嘲笑と意地悪い諷刺とに偏したからである。

だが、この暗示は當時代の人々にははつきりしなかつた。『惡靈』に關する評論の大部分はこの作を或る尊敬すべき人々に對する意地悪い漫畫として評價した。この非難そのものが既に、この小説の本質的内容と根本的課題とが正當に理解されなかつたことを語るものである。特に當時の批評界の問題となつたのは作中のステパン・ヴェルホヴェンスキイなる人物と、カルマーゾノフな

る人物とである。それは前者に於てグラノーフスキイ（西歐派の一指導者、一八一三年—一五五年）を諷し、後者に於てツルゲーネフを諷してゐることが明かに分つたからである。尤も茲に言ふグラノーフスキイはポロンスキイが説明してゐる通り、歴史的人物としてのグラノーフスキイでなく、一八三〇年代及び、四〇年代の或る社會層を指したものである。

また作者はシャートフなる人物の口を籍りて、ベリンスキイとその徒輩とがフランスの社會主義にかぶれてロシアの民衆を理解することの出来なかつたことを攻撃してゐる。其他ワルワラ・スタヴローギナのペテルブルグ旅行の記事に於て、當のワルワラと彼女の傲慢な師友とが侮蔑されてゐるばかりでなく、六〇年代及七〇年代の精神的アリストクラシイが全部諷刺されてゐるところを見ると、この小説は當時の社會の個人的代表者の諷刺ばかりでないといふことが言へる。

この小説の構成に際して作者は諷刺的方法を基礎として、各人物を典型化しながら全篇殆んど擬狂詩^{パロディ}で終始してゐる。そして最も屢々擬狂詩の對象となつたものはツルゲーネフの『充分だ』と、詩人オガリョフの『學生』と、グラノーフスキイの『手紙』とである。が、ステパン・ヴェルホヴェンスキイのロマンチックな詩やチェルヌイシェーフィスキの美學に對する擬狂詩も有名なものである。其他文壇のカドリールは當時の文學的傾向を諷したものであり、シガリョフの理論

はユートピア社會主義の空想に對する綜合的擬狂詩^{パロディ}であり、ピョートル・ヴェルホヴェンスキイのイデオロギイは有名な虛無主義者セルゲイ・ニエチャーエフの見解に對する優れた擬狂詩^{パロディ}である。

二

ドストエーフスキイ自身は『惡靈』を書きながら、當時の批評家が之を評價したよりも遙かに多くの價値をこの小説に附してゐる。一八七〇年五月二十八日ドレスデンからストライホフに送つた手紙に、「私は未だ曾て斯種の作品に於てこれ程のテーマを取扱つたことはなかつた。この作から何が出るか、全く豫測することが出来ない」と、非常な自信を以て言つてゐる。

ドストエーフスキイの通信は、彼が自分の意匠を具現して行くその苦心の跡を傳へてゐる。彼に取つて創作は遊戯ではなかつた。それは満足から懷疑への斷えざる動搖を伴ふ超人間的勞力であつた。特に『惡靈』を書いてゐる最中、その課題が餘りに異常であつたため、成功への疑ひが甚しくドストエーフスキイを悩ました。彼がこの小説に對する熱心と興奮とは、多くの批評家が言つてゐるやうな「ニエチャーエフ事件」の描寫といふよりは遙かに大きな問題に觸れてゐることを語つてゐる。一八六五年十一月のイワーノフ殺害事件の後に起つた所謂「ニエチャーエフ事件」なるものは偶々この作の端緒となつたに過ぎない。この事件はドストエーフスキイの意匠に於て

も小説そのものに於ても別に中心的地位を占めてゐるのでなく、單に作者が「大事件」と稱してゐる實社會のエピソードとしての特質を持つてゐる。一八七三年、皇太子アレキサンドル大公から、『惡靈』の作者は自分の作を何う觀てゐるかとの間に對する答の手紙に於て、作者はこの小説を「殆んど歴史的素描」だと稱し、「父より子へ代々發展して來た思想の傳統性と繼承關係」とを表現する意圖であつたと言つてゐる。つまり十九世紀の三、四〇年代の理想主義者の時代から六〇年代の虛無主義者の時代に至る思想發展の傳統的推移を睨つたものである。「我がベリンスキイ達やグラノーフスキイ達は、彼等がニエチャーエフ黨の直系の父祖だ、と言はれても恐らく信じないだらう」、と作者は言つてゐる。

ドストエーフスキイは『惡靈』に於て思想の傳統性を描寫することを目的としながら、同時にニエチャーエフ主義（虛無主義）の如き現象が如何にしてロシアの社會に生起し發展し實現されるかを示さうとしたのである。だが、ニエチャーエフ主義はドストエーフスキイに取つては單なる偶然事ではなく、革命の所産であつた。だから、彼はこのエピソードを捕捉して革命の道德的本性を曝露しながら、直接その心臓に打撃を加へんとしたのである。「社會」が諷刺の對象となつたのは、一般社會が革命思想に浸潤してゐたからである。その際ドストエーフスキイは自由主義者と社會

主義者とを區別しなかつた。それもこれも彼に取つては虛無主義者であり、否定者であり、惡魔に憑かれた人々であつた。彼が自分の作品に於て、彼等に對して如何なる態度を取つたかは、一八七〇年三月二十四日ドレスデンからストラエーフに送つた手紙の句を記憶するだけでも充分である。彼はストラエーフが『婦人問題』と題する論文に於て虛無主義者と西歐派とを攻撃した文章が餘りに、手ぬるいと言つてゐる。「貴下は餘りに餘りに、優し過ぎる。彼等に對しては手に筈を持つて書かなければならぬ。多くの場合貴下は彼等に取つて餘りに聰明過ぎる。貴下が若し彼等をもつと大膽に、もつと荒々しく攻撃したら、もつと良かつただらう。虛無主義者と西歐派には根本的の筈が必要である。」

三

『惡靈』の最初の課題は以上の通りであつた。革命的疫病に對し、虛無主義者と自由主義者とに對し、父の時代と子の時代とに對して攻撃の鋒先を向けた傾向小説として、この作は手に筈を持つて、意地悪く無遠慮に書かれた。少しも青年に氣兼ねすることなく、却つて曝露と嘲弄と責罰とで彼等の眼を開きながら書かれた。斯かる課題は諷刺作品としての小説の形式を豫め決定して、全篇擬狂詩と機笑と諷刺とに貫かれてゐる。是等の要素は『惡靈』の何處を開いても直

ぐに目につく。

然るにこの小説はその發展過程に於て他の藝術要素の侵入に出遇つた。そして是等の新しい要素はこの作の構成を複雑にし、全く別なプランと出所を有する幾多の人物を小説に引入れて、所謂並行的物語にしてしまつた。若し我々が、ドストエーフスキイの世界觀と彼の革命に對する關係とが如何なる心理的及び社會的地盤に發達したかを考へるならば、この新要素の侵入はおのづから了解出来る。

ドストエーフスキイは『作家の日記』に於て「一旦クリストを拒否したら、人間の智力は驚くべき結果に到達することが出来る。」と書いてゐるが、『惡靈』はこの驚くべき結果を人類に示さんとして書かれたものである。恰も圓の周圍が中心に向つてゐるやうに、凡ての人物は無神論者に一括される。スタヴローギンの悲劇的冷靜、キリーロフの無知、ピョートル・ヴェルホウンスキイの惡魔的兇暴、シガリョフの狂信的遲鈍、リプーチンの小詐偽師的根性、スタヴローギン大將夫人の自己満足的愚鈍、フェーデカの一本氣な殘忍性、ユリヤ・ミハイロヴナの饒舌、カルマージノフの陋劣な自己惑溺——凡ては無神論者から來てゐる。何れも皆「恥すべき無神論か、でなければ平氣な破廉恥漢である。」ドストエーフスキイは豫て大作『無神論者』或は『大罪人の一生』を計畫

してゐたが、スタヴローギンはつまりこの大作の主人公の變形である。ドストエーフスキイはこの大作に就いて書いてゐる。「全篇を一貫してゐる主要な問題は私が一生意識的にも無意識的にも苦しんだ神の存在といふことである。主人公は一生の間に或は無神論者、或は信者、或は狂信家又は異端者に、そして再び無神論者になつてゐる。」スタヴローギンの本質はこの數行の中に表明されてゐる。他の特質はこの前提からの推測に過ぎない。

だが、スタヴローギンは恰も別な世界から現れたかのやうに、『惡靈』の根本的テーマとは有機的關係を持たない幾多の新しい人物を小説に引入れつゝ、是等の同伴者と共に小説の第二のプランを形造つてゐる。つまり内面的にも外面的にも小説の根本的意匠とは異つた一種の並行的物語を構成してゐる。この二つの物語はその様式に於ても互に異つてゐる。各人物の獨特な構成とその心理的・肉體的特質の諷刺的表現とは、各人物にカリカチュアとグロテスクな姿を附して彼等は各人物が何れも習ひ憶えた役割を演ずる扮装俳優のやうである。その一人々々がそれ／＼の惡を象つた假面を代表してゐる。たゞスタヴローギンとその同伴者のみは、觀客席から直接假面劇の舞臺裏に偶然立寄つた人々のやうに見える。彼等は外貌に於て精神的深みに於て、悲劇的な眞面

目さに於て、また扮装や滑稽化の無い點に於て他の人物と異つてゐる。例へばリーザ・ドロズドワ、ダーシャ、マウリーキイ・ニコラーエウイチなどがそれである。彼等は『悪靈』の一般様式から脱して、別な藝術方法で作られてゐる。眞の悲劇的人物たる彼等は道化芝居の外邊に逸れなければならなかつた。それ故に悲劇の主人公は謎のやうに見える、その出現と存在とは全く偶然の原因に基けられてゐる。主人公の斯うした謎のやうな地位は、我々がスタヴローギンの精神状態と革命に對する彼の態度とを分析して見たら一層明瞭になる。

四

傳統的な解釋では、スタヴローギンを『悪靈』の中に描かれた陰謀の眞の中心點として、ヴェルホウエンスキイの如きは彼の飼犬に過ぎないと見てゐる。この意味に於て批評家グロスマンはスタヴローギンを、世界文學中バクーニンの人物を最もよく代表した一人だと言つてゐる。然しスタヴローギンは革命家でないばかりか、曾て革命家だつたこともなかつた。この事は小説の中にはつきり示されてゐる。彼は曾て運動の指導者でも何でもなかつた。若し彼が革命に多少共關係があるとするれば、それは閑人として退屈の餘り偶然關係したに過ぎない。要するに彼は惡の深淵に沈みつゝ、ドストエーフスキイが『大罪人の一生』の爲に作つた筋書を樂譜か何かのやうに演出

したに過ぎない。ポロンスキイはスタヴローギンに就いて言つて居る。「これはドストエーフスキイの特色的な人物であり、彼が熱愛する恒久のヒーローであり、不信仰と罪惡と墮落の淵を通じて來た懺悔せる虚無主義者である。スタヴローギンの獨特なところは、彼が自由主義者や社會主義者を中心とする革命的環境に住んでゐるといふ事情である。この無信仰の環境は彼の精神を試煉するための熔鑛爐となつた。彼が、この小説を書き初めてから可成り時日を経過した後突然出現したといふ事情も、彼の人物に絡まる多くの補足的特質を説明してゐる。その最も著しいのは彼が革命に接觸してゐることである。この接觸は直接でなく、間接ではあるが、別々な出所を有する二つの藝術層、二つの意匠の接目となつてゐる。即ち、虚無主義者ピョートル・ヴェルホウエンスキイを中心とする悲劇的道化芝居とスタヴローギンを主人公とする眞の悲劇とを繋ぐ結目となつてゐる。これが小説の全構成の上に反映して獨特の複雑さを加えた。だが、この二つのプランの結合は有機的でなかつたから、その接目は薄弱であり、曖昧な印象を起させる。スタヴローギンは久しくドストエーフスキイに愛撫された藝術的形象として、ドストエーフスキイ自身さうであつたやうに、一生神の實在に就いての思想に悩まされた。彼は試煉のための熔鑛爐として革命を必要としなかつた、革命がスタヴローギンを必要としなかつたやうに。事實革命は斯かる熔

鑛爐には役立つなかつた。スタヴローギンは冷靜にヴェルホヴェンスキイの説を聞きながら、たゞ機械的に何氣なく革命に惹付けられたに過ぎない。」

だが、現代のロシア人のやうに神への信仰を失つたスタヴローギンは、いつかシャートフに信仰を説き、キリーロフに無信仰を説きながら、先づ自から信仰しようとして、信仰と無信仰との間に動揺した。つまり彼は曾て懷疑の熔鑛爐に在つた時代のドストエーフスキイ自身の役割を演じたのである。

五

以上は作品の構成及びプランの上から見た研究であるが、更に作中の主要人物の思想、性格に就いて附加しておく。

スタヴローギンは無政府主義者バクーニンをモデルにしたと言はれる人物で、確かにこの作の中心人物である。彼はまだ二十五歳の青年で、口數を利かず、温なしく、同時に勇敢で、自信が強い。思想に於ても極端から極端に趨る人で、信仰から無神論に轉じ、社會的虚無主義から宇宙的虚無主義にまで變つてゐる。彼の顔は假面を想ひ出させる。この顔の描寫に於て作者は、或時期に自分の凡ての天性を發揮した人が、或時期になつて一種の内的不動の状態に冷却したことを

示さうとしたやうに思はれる。

斯くしてスタヴローギンは我々の前に、その生涯の二つの時期の境界に於て現はれる。以前のペテルブルグの生活、大酒、決闘、淫蕩、賭博等に充ちた放縱な生活と、彼の外國旅行から始まつて居る新しい生活との境界線に立つて居る。

人間は何時までも凍りついた心と精神的無活動とに生きてゐることは出来ない。生れつき多くの特質を賦與されて居るスタヴローギンは必然的に前進しなければならなかつた。ロシアから外國へ出て、彼は最初からいろ／＼な思想問題に興味を惹かれた。そして此の點に於て非常な飛躍と活動とを示した。此の關係に於て小説は餘り書いてゐないが、その書かれた短かい言葉は非常に深い意味を持つて居る。「彼はヨーロッパを廻つて、エジプトにも行き、エルサレムへも旅行した。その後何所かでアイスランド學術探險隊にも關係して、實際アイスランドへも出掛けた。また彼は或るドイツの大學で一冬講義を聞いたといふことも傳へられて居る。」……

彼の内生活は絶えず不満足に悩み、エキゾチックな感覺にあこがれてゐる。四年の後彼は凡ての方面に於て多大なる輝かしい地平線を持つてロシアに歸る。けれども依然として何物にも満足することが出来ない。何物かを愛することも、何物かを創造することも出来ない。彼は祖國に歸

つたが、祖國には彼の住むべき家もなく、仕事もない。一種の新しいエヴゲーニイ・オネーギン（プーシキン作中の人物）である。自分の郷里にありながら宿なしの漂泊者となつてゐる。けれども一八二〇年代のオネーギンよりは遙かに内容のある、複雑な、現代的な、デカダンのな、そしてロシアに取つて遙かに意味のある人物である。

スタヴローギンは再び歸國した時には靜かに、注意深く、落着いて見えた。それは或る抽象的な思想が彼を支配してゐたからである。以前彼の輝かしい眼色はひどく落着いてはつきりしてゐたが、今や彼の眼色には嚴肅と沈思と放心とが認められる。それは新しい内面的過程の徴候であつて、心理的といふよりは智的のものであつた。彼に於ては確かに新しい生活が始まつた。それは精神的といふよりは單に頭だけの新生活である。複雑ではあるが力が弱い。従つてそれは彼の天性に影響することが出来ない。彼を更生させることが出来ない。彼の血液は凡て頭に上り、思想の働きのみに注がれて、彼の性格を弱くした。で、人々との關係に於ても、自分自身の感覺に於てすらも彼は以前の緊張を失ひ、以前の卒直さを失つて了つた。彼は時々その思想に没頭して、人の入つて來るのも分らない時がある。一種の智的催眠である。然し彼の正當の妻、半狂ひのピツコの女レビヤドキナを訪ふた時から、彼の心理的生活は幾分か波立つて來た。レビヤドキナは彼

の自我の隠れた病所に觸れた。彼に於ては暫く眠つてゐた凡ての悪い本能が目醒めた。

彼女の所から出た彼は途中で彼を待つてゐたフェーヂカに出遇す。この放浪者はピョートル・ウエルホウエンスキイからピッコの女を殺すやうに焚きつけられてゐるので、その爲にスタヴローギンから金を取らうとして彼を威嚇し始める。が、あべこべにスタヴローギンは彼の首筋を捉へて橋の上に叩きつける。彼に於ては今迄眠つてゐた野獸性が目覺めたのである。彼は最早や此の野獸性に打勝つことが出来ない。やがて彼は悪魔のやうな大きなヒステリックな笑ひを發する。そしてフェーヂカに金を與へて、それで彼はピッコの女の殺害に沈黙の承諾を與へたやうなことになる。

その後彼は益々氣短かく、怒りつぽくなる。周圍の人々に對して平衡を保つことが出来ない。リーザと一夜を送つた翌朝、彼は弱い無氣力な自分を發見した。美しいリーザに接觸して人生の春を取返さう、自分の元の生活の歡樂を再び味はふと試みたが、その結果は自分がさういふ肉慾の爲には全く不具者になつて居ることを自覺しなければならなかつた。

生活に役立たないことを感じた彼はもう自殺する外には道がなかつた。然し彼は死ぬ時にも何等の發作も、絶望も、痙攣もなしに死んで居る。首を縊る時にも、何うすれば苦痛を免かれるかといふ冷やかな智力が働いて居る。彼は死ぬ前ダーシヤに書置して言ふ。「自分は放蕩に没頭した

が、心から放蕩を好んだ譯ではなかつた」と。彼は最後まで智の人であつた。

六

シャートフはドストエーフスキイが自分のスラヴ主義を代表させた人物である。彼は初め虚無主義者ピョートル・ヴェルホウンスキイ（ニエチャーエフ）の陰謀團と交つてゐたが、後には彼等の思想の誤つてゐることを自覺し、彼等と絶縁して信仰に生きる。シャートフがスタヴローギンの頬邊を握り拳で殴つた後で、スタヴローギンはシャートフの所を訪ねて、二人の間に思想上の談話が交はされるが、その時シャートフは彼の前に自分の思想を述べて居る。それは何時かスタヴローギンが彼に吹込んだと同じ思想である。シャートフは前方にのしかゝるやうにして眼を輝やかし、右の手を舉げて、殆んど威嚇するやうな態度で始めた。

「君は知つてゐるか、今世界に於て神を保持する唯一の民族は何の民族であるか。新しい神の名によつて世界を更新し、世界を救ふ所の民族は何の民族であるか。生活と新しい言葉との鍵が何の民族に與へられて居るか、君は知つて居るか？」この感激的な言葉を言ひながら、シャートフはその民族がロシア國民であると信じて居る。神を保持する唯一の民族、生活の鍵を握り、神に關する新しい言葉を以て世界を更新する使命を有する唯一の民族はロシア民族である。斯くして現

代の歴史に於けるロシアとその使命に就いての問題が最初から救世的地盤の上に立脚して居る。宗教心はロシア人の根本的特質で、ロシア人は無神論者となることが出来ない。無神論者はロシア人でない。是れがロシアに對するシャートフの根本思想である。彼の凡ての思想は一つの系統を造りながら凡て此の根本思想から出て居る。此の思想は當時の反宗教的な、世界主義的な性質を持つてゐた社會革命的思潮と對抗して、シャートフの頭に構成されたのである。シャートフは此の革命思潮が、國民の思想、生活、國民の希望や空想と懸離れて居ることを感じつゝ、論理的に別な思想系統を求め出したのである。この思想系統にはロシア國民精神の最も深い傳統が攝取されて居る。シャートフはロシア革命黨の哲學的學說に對抗して、ロシア國民はその精神の素質に於て深く宗教的であるといふ説を確立し、この思想を綜合して、更に他の凡ての民族にまで及ぼした。彼は言ふ、「凡ての國民的運動の目的は、凡ての國民に於て又その存在の凡ての時期に於て神を求むること、自己の神を求むることである。そして唯一の眞實なるものとして神を信仰することである。神は全國民の綜合的人格である。」是れがシャートフの哲學の基礎で、この説は歴史上偉大な代表者を有し、今日までまだ説き盡されない大きな思潮である。この哲學は幾分か異つた色彩に於て矢張り近代文學の中にも現れて居る。

各國民の歴史が無意識的な自然の力によつて動かされつゝ最後の眞實を求めて居ることは疑ひを容れない。この最後の眞實が各國民の歴史上の過程に最高の意味を附與するのである。凡ての國民の経過しつゝある生活上の境遇がたとへ何うあらうと、その生活の内的動機は理想的宗教的性質を有つて居る。國民的創造はこの語の廣い意味に於てその國民の宗教的自覺から發する。凡ての國民の思想的宗教的生活が、その國民の特質を帯びて居ることは言ふまでもない。何故なら凡ての創造、特に宗教的創造の如き深い無意識的創造は、國民的個性の凡ゆる力の共同を要求するからである。

斯様に神を求むることは意識的にせよ無意識的にせよその國民々々によつていろ々々な色彩を持つて居るが、神の觀念其物は宇宙的でなければならぬ、全人類的でなければならぬ。然るに各國民は各々自己の特種の神を有たなければならぬといふシャートフの説は、宗教の本質に戻るものである。結局彼はスラヴ主義の偏狹に陥つて居る。

斯くてシャートフは自己の從來の社會的見解を裏切つて、反對の極端に陥り、今では正教主義の民情派ナロドニクの使徒となつて、虛無主義とその革命的反抗とを非難して居る。そして此の非難にはドストエーフスキイ自身の精神が見えるのである。ドストエーフスキイは單にシャートフの理論的

難だけで満足せず、更に此の人物を使噓して革命黨を密告させようとして居る。正教主義の理想家であり、また熱中家であるシャートフには、淺薄な革命運動が可厭いやで堪らないので、彼自身も密告しようと思つて居る。ドストエーフスキイはこの種の革命運動を目して、國民的地盤を離れた皮相淺薄なものと考へて居る。愈々レビヤドキナが殺害され、リーザが怒り狂ふ群衆の爲に殺された後、シャートフは最後の憎惡に燃え立つた。彼の心には嵐が起つて、今や驟然起つて一切を曝露すべき時が來たと思つた。所が此の運命的の瞬間に彼の妻君が戻つて來て、スタヴローギンの子供を産み落すのである。そこで彼は心機一轉して、俄かに優しい心持になり、「惡漢」や「人殺し」を一切赦した。

シャートフの道德的特質は以上述べた通りである。もと虛無主義者であつた彼は、今ではスタヴローギンによつて彼の靈に投ぜられた思想の催眠に陥つて、正教主義の民情派ナロドニクと成り終り、ロシヤ史上の世界的運動に對して非常な憎惡心を抱いて居る。彼の多くのモノローグには作者自身の聲が聞える。けれどもドストエーフスキイは同時にこの感傷的正教徒が神を信じて居ないことを指摘して、この人物を自分から突き放す場合もある。シャートフの此の不信は彼が曾て西歐思潮の感化を受けて或る期間虛無主義的空氣を呼吸してゐたことによつて説明が出来る。だが結局彼は

虚無主義者の秘密を其筋に密告したといふ嫌疑を受けて、ピョートル一味の爲に暗殺されてしまふのである。

七

キリーロフは最も著しい、獨創的な人物である。作者は未だ曾て斯かる驚くべき心理を取扱つたことはなかつた。彼は社會革命によつて社會を救はんとする人々の間に獨特の地位を占めてゐる。彼は人神の思想に憬がれ、自ら超人たらんとした。

彼は社會經濟的計畫に對して新宗教の思想を提唱して居る。彼の考へによればこの新宗教こそは問題を根本的に解決することが出来る。何故なら人生に對する高尚な理解によつて、新宗教は人に完全な自由を與へるからである。この點に於て彼は新運動の先驅者である。彼は人類の幸福に就いての問題に對して新しい言葉を言つて居る。キリーロフの考へに據れば、最高の自由を得る方法は自殺である。意識的の自殺である。それには人間の自由を妨ぐる二つの大きな先入子を打破しなければならぬ。それは死そのものに對する恐怖と彼世に對する恐怖である。それも是れも人智の誤謬に過ぎない。幸福への道を塞いでゐるイリュージョンに過ぎない。死の苦しき瞬間は生の大なる苦痛と比較したら何でもない。そして彼世に就いての觀念は唇氣樓に外ならない。

彼は言ふ「生は苦痛であり、生は恐怖である。そして人は不幸である。今は一切が苦痛であり恐怖である。今日人は生活を愛してゐる。何故なら苦痛と恐怖とを愛してゐるからである。そしてそのやうに行つた。今日生活は苦痛と恐怖のために與へられてゐる。そこに凡ての虚偽がある。今日の人間はまだ本當の人間でない。やがて幸福な傲慢な新しい人間が来る。新人に取つては生も死も問題でない。何うでもいふ。苦痛と恐怖とを征服するその人は自身神となるであらう。」彼に據れば、人間は自殺を遁れて、生きて行くためにいろんな形式に於て神を發明した。が、彼だけは人類の歴史に於て神を發明しない唯一の人間である。神がなければ彼自身神とならなければならぬ。即ち人神たる彼に取つては自我を示すことが萬事である。そして自我の最高潮は自分の手で自分を殺すことにある。斯く考へた彼は自分の思想を徹底させるために、ピョートルがシャートフを殺した罪を自分に引受けて自殺するのである。要するに彼の説は現代人の思想であり、神人に對する人神の思想である。この點に於てキリーロフはニーチェの先驅者と言へる。

八

この作は七〇年代のロシヤ讀書社會の進歩的分子から非常な攻撃を受けた。彼等は此の作に於て作者の憎悪と政治的保守主義の外何物も見ることが出来なかつた。然しドストエーフスキイは

ロシアの自由主義とロシアの革命とを非難しつつ、その場合普通の保守主義に立脚してゐるのでなく、ビザンチン神學の基礎に立つてゐる。ドストエーフスキイはこの小説に於て正教スラヴ主義の色彩を持つた民情派ナポレオンとして現れてゐる。そして彼の民情主義はビザンチン思想を内容としてヨーロッパ風の合理主義と大いに戦つてゐる。それがため民衆運動にたづさはつたロシアの自由主義の公衆は彼を離れた。ドストエーフスキイの民情主義とロシア自由主義の民情主義とは互ひに對抗してゐた。自由運動はロシア國民を無神論化しようとした。そしてその計畫と政治的意圖とを解放運動と繋いだ。即ち凡ての宗教と凡ての神祕から民衆を解放しようとする運動である。然るにドストエーフスキイは宗教思想の助けによつて、即ち神の助けによつてロシアの生活を改造しようとするのである。けれどもドストエーフスキイの神は彼によつて複雑な思想系統に造り變へられ、宗教哲學的象徴に變へられて、現實の生活と離れ、この生活を猛烈に否定してゐる。要するに『惡靈』は大なる怒りの書である。同時に『惡靈』はロシア文學の默示録とも言はれる。徹頭徹尾此の小説は默示録の色調を帯びてゐるからである。

四、『カラマゾフ兄弟』の研究

一

『カラマゾフ兄弟』(一八八〇年)はドストエーフスキイの晩年の大作であるばかりでなく、その問題の複雑な點に於て、人間精神の把握の深刻な點に於て、また人類の苦惱に對する深い理解と博大なる同情とに於て、ロシア文學中の最大傑作である。ドストエーフスキイがこの作を思ひつひたのは十年前のことであるが、十年前と言へば丁度彼が外國から歸つた頃である。この頃からドストエーフスキイに於ては内面的精神活動の結果を反映してゐる創造力の最も高潮した最後の時期が始まつてゐる。彼は既に以前徒刑にあつた時に聖書の理想に深く沈潜しつつ、その後に至つても幾多の作品に於て人間生活に於ける二大要素の戦ひを描いてゐる。即ち光明なる福音の理想と暗黒なる惡の要素との戦ひである。ドストエーフスキイは偉大なる心理解剖の藝術家として、人間の心の中に惡に對する動機と理想的衝動の閃きとが奥深く潜んでゐるのを探し出すことが出來た。今彼は最後の傑作『カラマゾフ兄弟』に於て人生に於けるこの善惡二要素の戦闘を

完成せんとするかの如く、その全力を傾倒してゐる。この戦闘は既に『貧しき人々』に始まり、『虐げられし人々』、『罪と罰』、『白痴』等に發展してゐるが、作者は是等の作品に於て、クリスト教的意識の微かな火花がラスコリーニコフやソーニャ・マルメラードワやムイシュキン公爵等の心の中に明滅しつゝ再び人間生活の苦痛や罪惡や不幸災難の中に燃え立つところを示してゐる。そして『カラマーゾフ兄弟』に於てはこの戦ひがゾシマ長老やアリオシャに代表されてゐる光明な要素の最後の勝利に終つてゐる。つまりこの作には問題の最後の解決に對して推理の偉大なる力が集中されてゐるのである。

これと關連して『カラマーゾフ兄弟』には作者の世界觀の二重性が鮮かに示された。ゾシマ長老の教義とアリオシャの人物に於て、作者は人生に對する謙虚なクリスト教的見解に就いての思想を展開してゐるが、同時にイワン・カラマーゾフの熱烈なる批判に於ては懷疑と否定の深淵が大きな口を開いてゐる。けれどもドストエーフスキイは人間道徳律の創造に於て、勤勞階級の集團的創造力と階級的規律の意義を理解しつゝ、結局無信仰の人間は、自分自身に放任された人間は、罪惡の道を進むものだといふ考へに到達した。「神が無いならば一切が許される。」——これがドストエーフスキイの斷案である。

二

『カラマーゾフ兄弟』の社會的基礎は舊ロシアの貴族的農奴文化の破産である。その最後の代表者は破廉恥な好色漢の道化者であり、貪婪飽くことを知らない肉慾の奴隸であり、地獄の火をさへ恐れない無信仰者のフォードル・カラマーゾフである。彼はロシアの農奴制時代の貴族社會の一人として、その醜汚な生活をまざ／＼とさらけ出してゐる。

「いつも高慢で疑ひ深く、而も人を馬鹿にしたやうな、小さな目の下に垂れた長いだぶ／＼した肉袋や、小さいけれど脂切つた顔に深く刻まれた澤山な皺の外に、尖つた頤の下から、まるで財布の様にだぶ／＼した細長い大きな瘤がぶら下つてゐる。それが彼の顔に厭らしい淫亂な相を與へるのであつた。」

この描寫の中には恥すべき下劣な快樂の爲に情慾を消費し盡して生命を涸渇させた一人の人間の生涯が、物凄い程の力を以て示されてゐる。それに彼はロシアの知識階級の一人として、十八世紀のフランス哲學の缺點のみを吸収した爲に、その人生觀は恐ろしく否定的な皮肉な犬儒的なものとなつた。この飽くなき肉慾の奴隸は現在自分の子供に向つて言つてゐる。

「俺の考へに據れば……いゝかね、俺は今まで一人の女だつて見苦しいと思つたことはない。そ

これは俺の法則なのだ。その意味が解るかね。何うして解るものか。お前達の脈の中に流れてゐるのはまだ血でなくて乳なのだ。お前達はまだ穀の中から出ないのだ。俺の法則はお前達の見出すことの出来ない、お前達に言はせたら悪魔のやうな、頗るその面白いものを、どんな女からでも見出すことが出来るんだよ。何うして見出すかといふことを人々は知らなければならん。それが大切な點だ。それが才能といふものだ。俺に取つては不纏織な女といふものはない。女であるといふその事が既に驚くべき不可思議なものだ。何うしてそれがお前達に解るものか。」と、斯んな調子だ。斯くてこの不自然な頹廢的な情慾の亡者は、慾に目が昏んで我子のドミトリイと「妖婦」グルーシエンカの愛を得んとして争ふのである。

三

この老父に三人の子がある。兄は非職中尉でドミトリイと呼び、先妻の子である。彼は幼少の時から母の親戚に引取られて養育されてゐたから、丁年に達した時初めて父親の顔を見た。中のイワンと末のアリョーシヤとは後妻の腹に出来た子で、イワンは理科大學を卒業し、平素はモスクワに住んでゐる。アリョーシヤは中學卒業後郷里に歸り、近郊の修道院に住するゾシマ長老の弟子となつて修行に精進してゐる。家僕のスマルダコーフはフォードルが或晩酔ひに乗じて白痴の娘

リザヴェータと通じて生んだ私生兒である。この親子五人のカラマーゾフ王國は渺たるロシアの田舎町に於ける一つの家庭を舞臺としながら、その意圖に於ては實に人類社會の一大象徴であつて、その中のドミトリイは現實のロシアを代表し、イワンは合理主義の西歐を代表し、アリョーシヤは未來のロシアを代表すると言はれてゐる。

三人の息子の中でも最も興味ある特色的な人物は中のイワンである。彼は父から利己主義と自愛心とを繼承して、その精神はヨーロッパの唯物的・個人主義的文化の爲に痛く害はれてゐる。悪魔の姿に象られたイワンの悪い方面は、その深刻な無神論（無信仰）と道德的虛無主義とである。彼は近者を愛することが出来ない。何の爲に愛するかを知らない。何故なら、神が無ければ個人的永生（靈魂不滅）もなく、永生が無ければ他人を愛する必要もないからだ。彼の考へに據れば、この意識的人神（人間の神化——超人）に對しては一切が許される。何をしても構はない。この教義をイワンは家僕スマルダコーフに焚き付けて、結局スマルダコーフをして「豚のやうな卑劣漢」である父親を殺害せしむることになる。この親殺しの罪は偶然な事情の廻り合せて、長子ドミトリイに被せられてゐるが、事實はイワンの教唆によつてスマルダコーフが殺したのである。そこには金錢問題、戀愛葛藤の如き、いろ／＼込み入つた個人的目論見が結び付いてゐた。だが、

『カマラーゾフ』の智的要求は非常に深刻である。その絶對的な道德的要求は、ドストエーフスキイが書いた凡ての中で辯證法的に最も困難なものである。ドストエーフスキイはイワンの個人主義を根本的に罰してゐる。ドストエーフスキイの考へに據れば、凡ての人は唯一のものである。各人は凡ての人の爲に責任を負はねばならぬ、一人に加えられた苦痛は凡ての人の苦痛である。神を受け入れるのでさへこの信仰を要件としてゐるからである。ゾシマ長老とアリョーシヤの心に宿つてゐる此の人類全一の感情をイワンは持つてゐない。それ故に彼は未來の應報を承認してゐる場合でさへ、神の世界と無辜な者（特に小兒）の苦痛との矛盾を受け入れることが出来ない。若し人々が孤立してゐるとすれば、無辜者の苦痛を受け入れる必要もなければ、またどんな未來の幸福の約束があつても暴虐者を赦すことは出来ない。ところで人類が全一のものであるとすれば、凡ての人は責任を分かち、凡ての人の苦しみを苦しみ、人々の間に勘定など有り得ないのである。斯くてイワンは自分の罪の重荷に堪えず、遂に發狂して治療に出掛けるのである。

ドストエーフスキイは一八七九年五月十日、『ロシヤ報知』の編輯局に送つた原稿（『謀叛』と『大訊問者』）に就いて編輯者リュビエーモフに宛てた手紙の中に書いてゐる、「この第五編は、私の考へからいふと、この小説（『カマラーゾフ兄弟』）の頂點である。それは特別な努力を以て完

成されなければならぬ。……只今發送した原稿には、自己の根本的主張を表明してゐる小説の主要人物中の一人（イワン・カマラーゾフ）の性格だけを描いた。彼の主張は、私が現代ロシヤの無政府主義の綜合と認めてゐるところのものである。それは、神でなく神の創造の意義を否定してゐる。凡ての社會主義は歴史的現實の意義を否定することから始まつて、破壊と無政府主義のプログラムにまで達した。根本的無政府主義者は多くの場合誠實な主張を有する人々であつた。私のヒーローは、私の考へに據れば、不可避的問題即ち小兒の苦痛の無意義なことを捉へて、そこから全歴史的現實の無意義さを引出してゐる。私はそれを立派に遂行したか何うか分らないが、私のヒーローが最高度の現實的な存在であることを知つてゐる。また別な手紙に於て作者は言つてゐる、「現代の最も輝かしい否定者は、直接惡魔の助言の味方であることを表明し、それが人類の幸福に取つてはクリストよりも確實であると肯定してゐる……。現代の虛無主義者の理想は人間の良心に對する暴虐の理想であり、人類を畜生にまで引下げることであるが、私の社會主義者（イワン）は誠實な人間である。彼は、人類に對する『大訊問者』の見解に同意であること、クリストの教義は人間を實際よりも遙かに高く持上げたといふことを直接に告白してゐる。『クリストの戒律は抽象的で困難である。弱い人間に取つては到底堪え切れない。それは自由と文明の法

則の代りに鐵鎖と奴隸の法則を人類に齎したのだ』と。是れが人類に對する愛の爲に言はれてゐるのだ。彼等虛無主義者は一體人類を侮蔑してゐるのか、尊敬してゐるのか？……」

この手紙には作者自身によつてイワンの性格が或程度まで説明されてゐる。イワンは徹底した無神論者である。彼が弟アリョーシャに語り聞かせた散文詩『大訊問者』には彼の深刻な懷疑的態度が遺憾なく表はれてゐる。彼は一切を意識的に考へ、凡てを頭腦に訴へ、冷い論理で貫いて行く。この點に於てイワンはロシア人でなく、純然たる西歐人である。ロシア人の考へ方は違ふ。複雑な矛盾のうちに絡まりながら、常に解決されないコントラストに出遇すのがロシア人だ。ロシア人は論理に反して感情によつて、矛盾に満ちた大きな世界を捕捉する。つまり無意識的綜合のうち捕捉するのである。そこに神があり、眞實があると意識しながら、ロシア人はこの綜合の中で燃焼してゐる。これがドミトリイの考へ方である。がイワンはこの綜合から離れて論理に終始し、結局眞理の實體を掴むことが出来ない。貴重なのは眞理そのものであつて、それを獲得する方法ではない。論理は凡ての人に於て無力であり、心は常に強い。心には未知の遠い世界から或高尚な微光が降りて眞理を啓示する。ところがイワンは心の啓示を論理で抑止しようとする點に於てロシア人でない。

イワンの哲學は幼稚なロシア文化ばかりでなく、西歐文化を通り越してゐる。彼の哲學はロシアの地盤に生えた惡魔哲學である。彼の思想にはロシアがまだ經驗しない無神論の萌芽があり、また西歐の合理主義に似て、それよりも進んでゐる。彼は現代人である。西歐の合理主義的思索の頂點に於て、神の觀念を受容れなかつた人はあるが、惡魔の不滿を以て神から離れた人はなかつた。或者は神を離れて世界に趨り、他の者は世界を離れて神に歸依した。が、世界からも神からも離れた者はなかつた。この新しい論理と心理はイワンによつて我々の前に啓示されたものである。彼の天才的譎言のうちには、人類の精神生活に於て未だ經驗されない複雑な心理の萌芽が宿つてゐる。

けれども我々はイワンの冷い論理の霧を通して軟かい微光の閃きを捕捉することが出来る。彼の陰鬱な物凄しい無神論的言説の間に、時として優しい人間味が微妙な心理的陰影を作りながら織り込まれてゐるのを發見することがある。聰明なるゾシマ長老はイワンの嚴正なる論理を聞きながら、彼の心に一種の懷疑と動搖とを洞察してゐる。長老はイワンのうちに高尚な心を、神人的要素を認めたのである。

愛と論理との分裂、茲にイワンの悲劇がある。彼は心では、内臟では愛して居り信じて居る。

彼は何よりも先に愛し且つ信するのだが、直ぐにその後で理智と論理で愛と信仰を否定する。この矛盾分裂の中に彼の生活の大なる不幸がある。アリューシヤはよく言つた、「論理よりも先に生活を愛しなければならぬ。たゞこの愛によつてのみ生活の意義を悟ることが出来る」と。イワンは偉大なる愛を以て人生を愛しつゝ、同時にこの愛を餘所にして、その偉大なる悪魔的論理によつて人生を思惟する。だが、彼の論理は彼の愛ほど偉大でない。彼の論理には狂氣じみた嵐のやうなものはあるが、光明がない、上からの微光がない。だが結局は彼も獨特な熱狂的なロシアの青年である。彼は理智を以て一切を否定しつゝ、神や靈魂不滅の如き永久的問題に就いて考へてゐる。

四

長男ドミトリイはカラマーゾフ王國の中心人物で、凡ての事件は彼の周圍に集中し、彼を中心として渦巻いてゐる。彼は生粹のロシア人で、この小説では現實のロシアを代表すると言はれる。教養の足りない、野生のまゝの、嵐のやうな性格の持主で、常に放蕩三昧に耽り、底抜けの亂行に身を持ち崩してゐる。が、同時にまた自から進んで甘受する苦痛によつて、民衆やクリストとの接觸によつて救はれてゐる。悪にも強い代りに絶えず自分の上にクリストを感じてゐるドミトリ

イの悪魔的な力の原型を、我々は『白痴』のラゴージンに於て見ることが出来る。

ドミトリイの容貌は思ひ切り大膽に描かれてゐる。「彼は二十八歳の若者で、中背で、快活な顔附をしてゐた。だが年齢の割にしては酷く老けて見えた。彼の筋肉は非常によく發達してゐた。で、彼が素晴らしい體力を有つてゐることは察するに苦しくない。然し彼の顔には一種病的な何物かゞ現れてゐた。」フォードルの先妻で強壯な美人アヂェライダの腹に生れた彼は、母親から隆たる筋肉と體力と快活な容貌とを享け繼いだのである。彼が父親に似てゐるのは、中背の身の丈と、彼を向ふ見ずの放縱な生活に引込み、年齢に不似合な幾分病的な人間にした性格とである。

ドミトリイの内生活も斯うした二つの要素に分裂してゐる。惡の要素と善の要素とが常に戦つてゐる。異教的の力とクリスト教的精神、悪魔的な情熱と神に對する祈禱の喜び——この相尅が彼を悲劇的性格にする。彼の心の二つの要素は彼の眼の中にも反映してゐる。一つは現世的な、瞬間の情熱に生きてゐるところの、そして凡ゆる個々の事物に襲ひかゝつてそれを奪ひ取らうとでもするやうな要素で、他は遠い、曖昧な、まだそれほどの力を有たないが、併し彼の凡ての行爲に影響する要素である。彼の魂の中には、ソドムの理想がマドンナの理想と共存してゐるやうに、彼の腫ればつたい近視らしい眼の中にも、二つの光が、即ち極端な悪魔的な放埒の火と夜明

の霧に蔽はれた青白い光とが同時に輝いてゐる。「彼の眼の中に、沈んだ憂鬱な何物かを見た人々は、彼が突然に笑ひ出すのに驚かされることもあつた。その笑ひは、彼がさうした憂鬱な眼附をしてゐる時にも、彼の内部に快活な戯れるやうな思想が存在してゐることを證明するものである。」だが、ドミトリイの沈思と憂鬱とを破る突然の笑ひは、快活な戯れるやうな思想の結果ではなくして、彼の内部に生きてゐる二つの要素の分裂が彼自身の神経に知覺される爲めであつた。彼は自分の心の最も眞面目な方面を支配して、其の方面から生活に必要な一定の材料を抜き出すことが出来ないのである。そして其方面が彼から迂り去る瞬間に彼は突然普通の現世的要素へ急轉しつゝ笑ひに襲はれるのである。之は寧ろ自分自身に對し、自分の内面的不調和に對する餘儀なき反射的な笑ひである。つまり分裂の悲劇から生ずる笑ひである。ゾシマ長老は深い洞察力を以て、ドミトリイの中にその内面的分裂から生ずる大苦悶を認めてゐる。「俺は昨日怖いものを見た。昨日あの人の眼はあの人の全運命を表してゐるらしかつた。あの人はよくあんな眼附をすることがあるからな。」

だが、ドミトリイに於ては時々猛烈な衝動が内部から突發するけれど、それがいつも完成された表現を見ない。地獄の火が起つても決して赤熱しない。何故なら、彼の心は常に或る泣かない涙に濕つてゐるからである。悪魔の力は、それと共に働いてゐる誠實と熱烈な自己譴責の情とによつて制限される。彼が誇り高いカチエリーナの貞操を金で買はうとした時も、彼は無言の儘彼女に金を渡すと、自から戸を開けてその儘彼女を歸してやつた。彼は悪魔の跡に跟いて行くと同時に神の御衣に接吻する男である。

彼の中に生きてゐる力強い天性は、彼の凡ゆる身振に敏捷な熱狂的な速度を加える。彼の生活の船は、全帆に風を孕んで波の上を疾走してゐる。而もこの力強い歩調は、彼の直截な、無邪氣な、熱狂的な心と彼の卒直さと勇氣とを示すものである。彼が悲劇的な分裂を味ひつゝも、なほ且つ全一の存在である所以は、彼の行爲の凡てに於ても、彼の言葉の凡てに於ても所謂完全な充實した感情が波打つてゐたからである。此の意味から彼は確かに純粹のロシア人だと言へる。

ドミトリイの言葉も矢張彼の感情のやうに音量が豊かで充實してゐて、彼の笑のやうに斷續的であつた。彼の言葉の中には、全世界の鮮やかな色彩が溢れてゐる。何故と云ふに、彼は十分な教育を受けてゐないに拘らず、世間で行はれてゐる凡ゆる事件に靈の接觸を保ち、なほ輕快で若しい敏感な天性を有つてゐる所から人生の種々雑多な事情に一々反應し得たからである。また彼の言葉は比喻に満ちてゐた。何故と云ふに、彼は凡ての事物の理論的方面を形而上的、抽象的

に見ず、空想的でありながらも、而も明瞭と人生の現象に結び附けて考へたからである。彼は元來詩的な人間である！彼はアリオシヤに會つて斯う言つてゐる。「我々は自然を讚美しようぢやないか——何うだね、何と云ふ美しい太陽だらう、何と云ふ澄んだ空だらう。樹の葉は皆緑を滴らしてゐる。宛然夏の眞最中のやうだ。午後の三時迄の此の静寂は何うだらう。」また或時アリオシヤに會つて、「一寸御覽、此の夜を。ねえ、何と云ふ眞暗い夜だらう。あの雲は何うだ、此の風の激しいこと。」と言つてゐる。自分の情熱が狂亂してゐるにも拘らず、また絶えずグルーシヤのことを考へ耽つてゐるにも拘らず、彼は何う云ふ譯か自然から離れなかつた。彼の氣分其ものが既に彼の周圍に行はれてゐる事情と全く自然な並行を保つてゐる。實際彼は自然を實感してゐる。で、彼の言葉には自然の匂がある。彼の生きた記憶は、彼の感ずる世界の詩の凡ゆる斷片を彼の心に印してゐる。

作者は此の小説の中でドミトリイが現はれる場面では必ず「突然」と云ふ言葉を使つてゐる。

此の言葉は彼の生活の特質と、その荒々しい感情の流れを語るものである。生れて來る感覺なり思想なりは、無氣力な内省から情熱的な行動へと急轉してゐる。此の感情の流れは、常にドミトリイの心を生かす所の歡喜と感激とを起すものであつた。彼は或現象を單純に感ずるのではなく

して、燃えるやうな其の心の凡ゆる力を以て、恒久不變に、歡喜し感激するまで感ずるのである。若しイワンの心中に冷酷の影が宿つてゐるとすれば、ドミトリイの心には恒に火が燃え、眞紅になつた炭火が焰を上げてゐるとも言へる。最後に、我々は彼の凡ゆる發作を通じて新生活への憧憬の惱みを聞き取ることが出来る。グルーシヤンカのことを考へる時ですら、彼の思想は善なる生活に就いての空想と繋がつてゐる。モークロエで底抜け騒ぎの酒宴の最中ですら、彼は自分の犯罪とそれから結果する自殺の考へを棄てなかつた。殊に彼の獄中での言葉は高尚な精神的感激に充ちたもので、彼に於て確かに「新しい人間」の更生を暗示してゐる。

五

第三子アリオシヤは理想的修道院に於て理想的修道士ゾシマ長老の訓陶を受けた理想的タイプの人物である。ゾシマ長老はドストエーフスキイがこの小説に於て悲痛の宗教を説かした人物で、クリスト教的無政府主義の宣傳者であり、その過去に於て罪と懺悔との道を通つてクリストに歸依した貴族の一人である。その愛弟子のアリオシヤはこの作に於てクリストの正義と愛と寛大と信仰との代表者として現れてゐる。彼は將來人類を救ひ、一切を更新し、民衆的なクリストの正義によつて知識階級を改造せんとする神祕的な使命に祝福されてゐる。既に雜階級的知識階

級の優良な若い分子は、例へばコーリヤ・クラツツキンとその友達の如き、アリオシヤの跡に跟いて行つてゐる。この人物こそは確かに、窮極に於て樂觀的なドストエーフスキイの宗教的・社會的綜合の藝術的具現である。

様々な性格を有つたロシア人の中には、空想的な優しい眼附をして、遙かの彼方を靜かに凝視してゐるやうな青年を如何なる時代にも見出す事が出来る。多くのロシア人の中には、何處かフョードル・カラマゾフを想はせるやうな人物もある。またドミトリイやイワンのやうな人物もある。而も斯うした人物は皆社會に於て行はれつゝある凡ゆる苦痛にそれ〴〵の關係を有つた現實の人々である。つまり此の社會の最も典型的な代表者である。所が、アリオシヤは實際生活に依つて造られた此の現在の組織、若くは此の固定した結晶體の一ではない。彼は此の生活の空想、即ち此の生活の未來である。で、若し假りに天上の神使がロシア人の姿を取らうとするならば、その天使はアリオシヤの姿を取つて人々の前に現れるに相違ない。アリオシヤは本當の天使として、一人から一人へと、即ちドミトリイからフョードルへ、フョードルからカチエリーナへ、カチエリーナからグルーシヤへと使した。彼は街ぢうの凡ゆる小路をよく知つてゐるので、輕々と籬を乗り越えながら、捷路ちかみちをして到る處に治療的効果を現すバルザムを配布して歩いた。併し彼が出入する

常住の家は、眞の聰明を藏してゐる郊外の白い修道院であつた。彼は其の接觸する凡てのものに精神的純潔と、優しく若々しい眞實との柔かい痕跡を残した。

凡ての人々は皆アリオシヤを愛してゐる。その愛も現世的な愛ではなくして、深い精神的な要素を帯びた超現世的な愛である。カラマゾフ一家の中で、たゞスメルヂャコフだけがアリオシヤを愛しなかつた。アリオシヤはグルーシヤに取つては、闇夜のやうに暗い彼女の内部に現れた「新月」である。彼女はアリオシヤの中に「王子」の品位を見出してゐる。彼は自力的には愛嬌よく凡ての人々と融合してゐるけれども、他力的には彼を何人とも融合させる事が出来ないからである。が、兎に角私達が『カラマゾフ兄弟』を讀むと、アリオシヤは新月として私達の想像に残る。彼の現れる處には、必ず一種の爽かな光と、柔かい空氣とが漂つてゐる。ドミトリイも心からアリオシヤを愛してゐる。彼はアリオシヤに對する自分の感情を其の荒々しい情熱や、嵐のやうな愛や、怨恨などゝ區別してゐる。彼に取つてアリオシヤは「高尚な人間」であり、「天使」である。世の中で自分の意見以外に、誰の意見をも尊重しないらしいイヴンでさへ、アリオシヤの言葉には注意して耳を傾ける。彼に取つて、此の小さな溫柔な少年の意見は尊いものであつた。彼はアリオシヤによつて自分を癒さうとしてゐたらしい。全世界の意見を容れない彼は、此の「小

鳩」即ち此の「潔白な天使」の意見を容れてゐる。所がフォードルはアリョーシヤの中に靈を望んでゐない。「愛らしい俺のアレクセーチク」と、彼はアリョーシヤに言つてゐる。彼は此の世に於て凡ての人々を恐れてゐるが、たゞアリョーシヤだけを恐れなかつた。

たとへアリョーシヤが一個の人格として描かれてゐても、彼は矢張り純空想的な人物である。即ちドストエーフスキイが藝術的な色彩より、寧ろ空想的・詩的色彩で描き出した非實在的人物である。彼はロシヤの現實そのものゝ人格化ではなくして、此の現實の内面的觀念である。併し其の觀念は高尚な現實を有つてゐる。何故と云ふに、此の現實の中には、國民的精神の眞實が隠蔽されてゐるからである。そして其の眞實は生活へ行く路を實感し、意識し、準備してゐるのである。尤もこの小説を読むと、アリョーシヤが現實の人物であるかのやうに思はれる事があるけれども、併しそれはロシヤの國民的要素の理想的方面が餘りに明瞭と描かれてゐる爲めである。アリョーシヤは狂信家でもなければ、神祕主義者でもない。彼は「早熟の人道主義者」である。典型的なロシヤの青年を我々の眼前に躍動させる爲めには、たゞ此の簡単な定義だけで十分である。さう云ふ人は如何なる深遠な神祕的な永久の問題を解決しても、自分の未熟な論理と、自分の生きた愛とを地上の事件と興味とに傾注する筈である。ロシヤ人の天性は架空な形而上的な理論で言

ひ現はされるものではない。ロシヤ人の天性を現はすものは、熱い血を有つた敏感な、そして凡ての實在に對して注意深い此の早熟の人道主義である。神と、靈魂の不滅とに關する抽象的な思想でさへ、アリョーシヤのやうな青年の判斷に於ては、實際へ引きつける鮮やかな具體的思想に變るものである。若いロシヤ人は思想を通して世界を見る能力を有つてゐない。だから若いロシヤ人は低く地上に棚引いてゐる哲學に熱中するのである。けれども若し此のロシヤ人の人道主義と、人道的信念とを凝視するならば、此の人道主義の理想が餘りに高過ぎて、地上の小さい哲學で其の理想を抱擁し、闡明する事の出来ないのを痛感せざるを得ない。斯う云ふ風に本能的な人道主義が破壊されて見ると、是非本當の偉大な形而上學が——嘗にロシヤのみでなく、全人類的な、世界的な、普遍的な、従つて眞に全人類を救ふ所の形而上學が組織されなければならない。而も全人類を救ふ此の文明はアリョーシヤの中に既に感じられる。之が爲めに我々は國民的精神の純なる表現として、及び國民的精神の偉大なる空想としてアリョーシヤを愛するのである。

六

スメルヂャーコフはフォードル・カラマゾフの私生兒である。自分が嫡子と同等の権利のないのを恨み、イヴンの感化を受けて極端な虚無主義者と化し、父を殺し自分も自殺したが、その死

ぬ前にイヴンに犯罪を自白し、彼が父を殺したのはイヴンの思想の傀儡となつたに過ぎないので、實際はイヴンが殺したも同然だと言ふ。

作者の考へに據れば、スメルヂャーコフは無神論と道徳的虚無主義との反^{アンチ}クリスト的教義を受け容れた國民的背教者のタイプである。彼は民衆の背教者として民衆の敵となり、凡ゆる方法手段を盡して蓄財に腐心し、「フランス共和國」への旅行を夢みてゐる人物で、人々に對してばかりでなく、神と良心に對しても小商人根性を發揮してゐる。社會學的に言へば、彼は自然經濟的族長制度の廢墟に起つた新ブルジョアの心理的肖像であり、初めて世界文學に現れた社會的・精神的小市民性と下司根性との最も輝かしいタイプである。

附 録

ドストエーフスキイ年譜

- 一八二一年 十月三十日モスクワに生る。
 一八三五年 モスクハのチエルマク寄宿學校に入學。
 一八三七年 母歿す。兄ミハイルと共にペテルブルグのコストマーロフ寄宿學校に入る。
 一八三八年 陸軍技術學校に入學。
 一八三九年 父、配下の農民のために殺さる。
 一八四三年 陸軍技術學校卒業。技師として技術局に勤務。
 一八四四年 バルザックの作品を翻譯す。處女作『貧しき人々』を書く。陸軍技師の職を辭し、文學者たらんことを志す。
 一八四六年 『貧しき人々』をネクラソフの主幹する『ペテルブルグ文集』に發表。ベリンスキイの激賞を受け、作家としての自信を得。『二重人格』、『プロハルチン氏』を『祖國雜纂』誌上に發表。
 一八四七年 『九通の手紙より成る小説』を『現代人』誌上に、『女主人』を『祖國雜纂』誌上に發表。
 一八四八年 ペテルブルグにペトラシエーフスキイ結社組織せられ、ドストエーフスキイ之と接近す。『弱き心』、『クリスマス樹と結婚』、『白夜』、『他人の妻』、『過去の人の物語』、『嫉妬深き夫』を書く。ペトラシエーフスキイ事件に連累して檢擧せられ、ペトロパウロフスキイ要塞監獄に投ぜらる。十二月死刑の宣告を受けしが減刑せられ、徒刑囚としてシベリアに護送せらる。『ニエ
 一八四九年

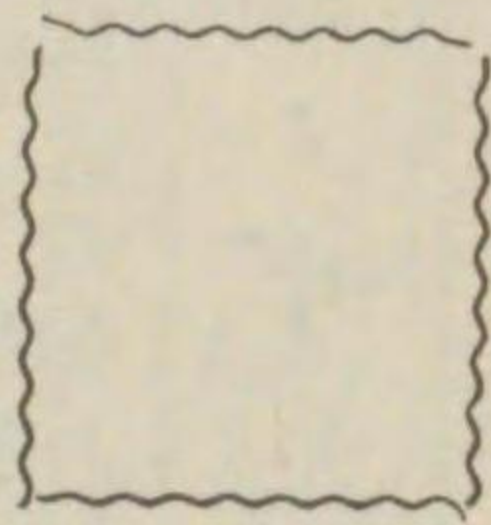
- 一八五四年
『トチカ・ニエズワノワ』を『祖國雜纂』誌に發表。
二月十五日刑期終る。新たに一兵卒としてセミパラチンスクなるシベリア守備軍第七大隊に勤務を命ぜらる。
少尉に叙せらる。
- 一八五六年
戀中の末亡人マリヤ・イサエワと結婚。『小英雄』を發表。
- 一八五七年
本國歸還を許さる。初めトウヴエリに居住、十一月の末ペテルブルグに歸る。『伯父の夢』を『ロシア報知』誌上に、『ステパンチコウオ村とその住民』を『祖國雜纂』誌上に發表。
- 一八五九年
二卷より成る全集を出版す。
- 一八六〇年
兄ミハイルと共に雑誌『時代』^{ツレミヤ}を發行。『虐げられし人々』と『死の家の記録』を同誌に發表。
- 一八六一一年
『穢はしき話』を『時代』誌上に發表。六月外國旅行に出發、パリ、ロンドン、ジエネワに逗留す。
- 一八六二年
『夏の印象に就いての冬の覺書』を『時代』誌上に發表。ポーランドに關する論文のため同誌は發行禁止せらる。夏の間ヨーロッパ旅行。ローマに滞在。
- 一八六三年
兄と共に雑誌『時代』^{エポハ}を發行。『地下室手記』を同誌に發表。四月妻歿す。六月兄ミハイル永眠す。
- 一八六四年
七月外國旅行に出發。十一月歸國。この年より一八六七年にかけて三卷より成る著作集を出版。
- 一八六五年
『罪と罰』を『ロシア報知』誌上に發表。『賭博者』を書く。
- 一八六六年
女速記者アンナ・スニートキナと結婚。四月外國に去り、一八七一年まで滞在。
- 一八六七年
『白痴』を『ロシア報知』誌上に發表。
- 一八六八年

- 一八七〇年
『永久の良人』を『ザリヤ』誌上に發表。
- 一八七一年
『惡靈』を『ロシア報知』誌上に發表。七月外國より歸る。
- 一八七三年
雑誌『市氏』の編輯に關係し、『作家の日記』を同誌に連載す。
- 一八七五年
『未成年』を『祖國雜纂』誌上に發表。
- 一八七六年
ドストエーフスキイ自身個人雑誌として『作家の日記』を發行、翌年に至る。
- 一八七七年
短篇二三種を書く。
- 一八七九年
この年より翌年にかけて『カラマーゾフ兄弟』を『ロシア報知』誌上に發表。六月ウラヂーミル・ソロウイヨフとオプチナ修道院を訪ふ。
- 一八八〇年
六月プーシキンの銅像除幕式に際し、ロシア文學同好會の爲めプーシキンに關する有名な記念講演を爲す。
- 一八八一年
一月二十八日ペテルブルグにて永眠。一月三十一日アレクサンドル・ネヴスキイ寺院に葬らる。
- 一八八二年
この年より翌年にかけて全集十四卷發行。
- 一八九四年
この年より翌年にかけて、雑誌『ニワ』の附録として全集四版發行。
- 一九三一年
國立出版所より、ルナチャールスキイを編輯長とするマルクス主義文學者の綜合編輯の下に『ドストエーフスキイ文集』發行。

綜合研究 ドストエーフスキイ再観 終り

ドストエーフスキイ再觀

昭和九年五月十二日印刷・昭和九年五月十六日發行



著 者 昇 曙 夢
發 行 者 東京市神田區神保町二ノ一三 大 竹 博 吉
印 刷 所 東京市牛込區山吹町一九八 高 瀬 印 刷 所
發 賣 所 東京市神田區神保町一 上 田 屋 書 店
發 行 所 東京市神田區神保町二ノ一三 ナ ウ カ 社
電話九段五五九・振替東京八〇一四七

定 價 五 拾 錢

目書版出社カウナ

ミ ラズ ウモ フス キ 著	グ ア 雅 ル 雄 編	マ ・エ ・レ 研究 所編	レ オ ン チ エ フ 著	ホ グ ハ イ ダ ノ フ 著	廣 島 定 吉 著	廣 島 定 吉 著	安 田 德 太 郎 著	廣 島 定 吉 著	米 村 正 一 著	松 村 四 郎 著	宮 田 保 郎 著
史的唯物論	帝國主義論	マルクス・エンゲルス選集	資本論研究	近世哲學史および辯證法的唯物論における因果性の問題	スピノザと辯證法的唯物論	臨床醫學と辯證法的唯物論	ヘーゲルと辯證法的唯物論	貨幣と信用	地代論	ソヴェト信用制度	
八四六版 四五〇頁 送料	四四六版 四七〇頁 送料	一五〇〇頁 21、25 24、30 送二六	七五〇頁 21、25、 28、30 送二〇	三四六版 三四〇頁 送料	三四六版 三四〇頁 送料	一四六版 一一五頁 送料	三四六版 三四〇頁 送料	四五〇頁 送料	四五〇頁 送料	四五〇頁 送料	四五〇頁 送料
定價一・五〇	定價一・五〇	定價一・五〇	定價一・五〇	定價一・八〇	定價一・八〇	定價〇・八〇	定價一・五〇	定價二・〇〇	定價三・五〇	定價一・〇〇	定價一・〇〇

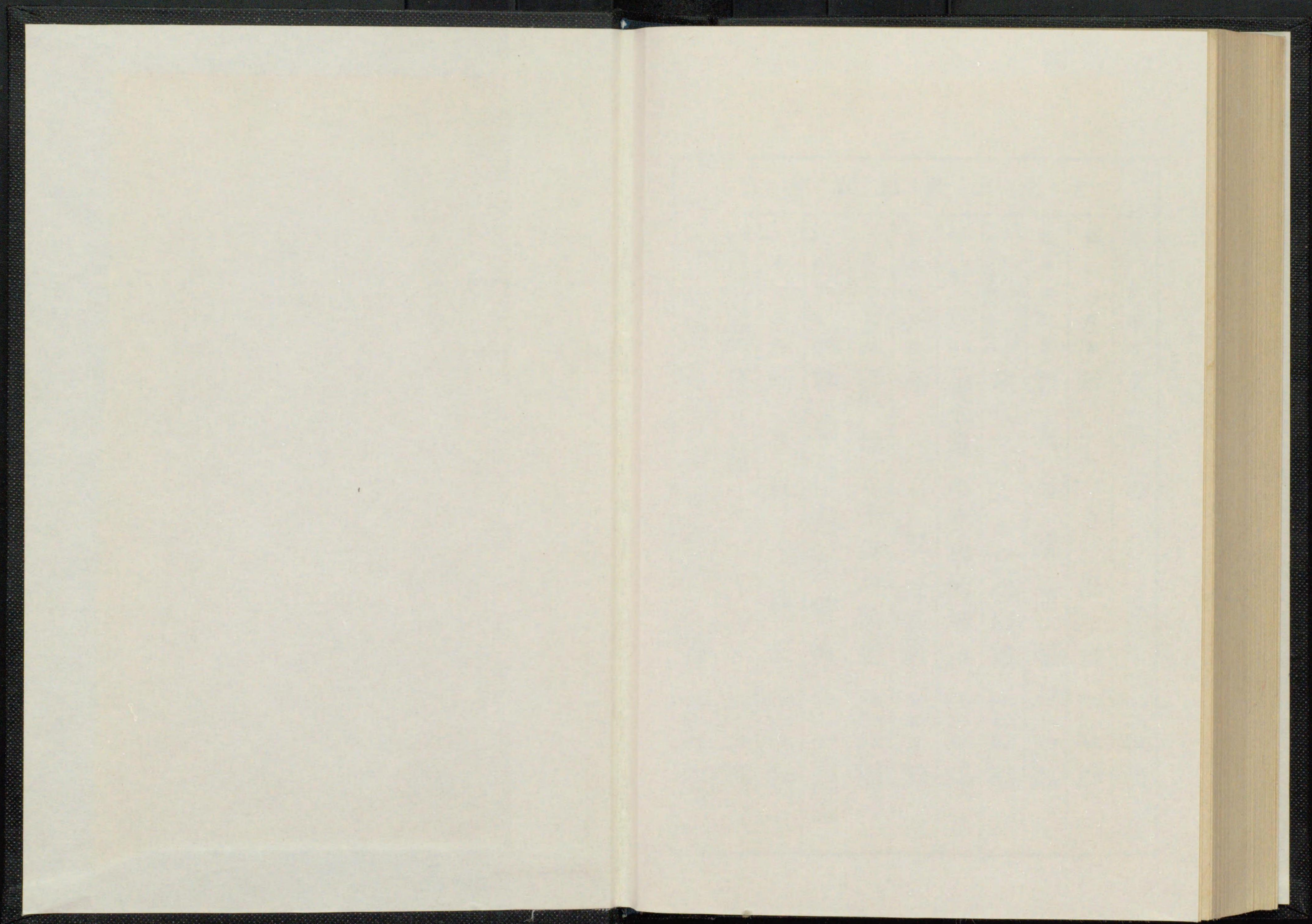
目書版出社カウナ

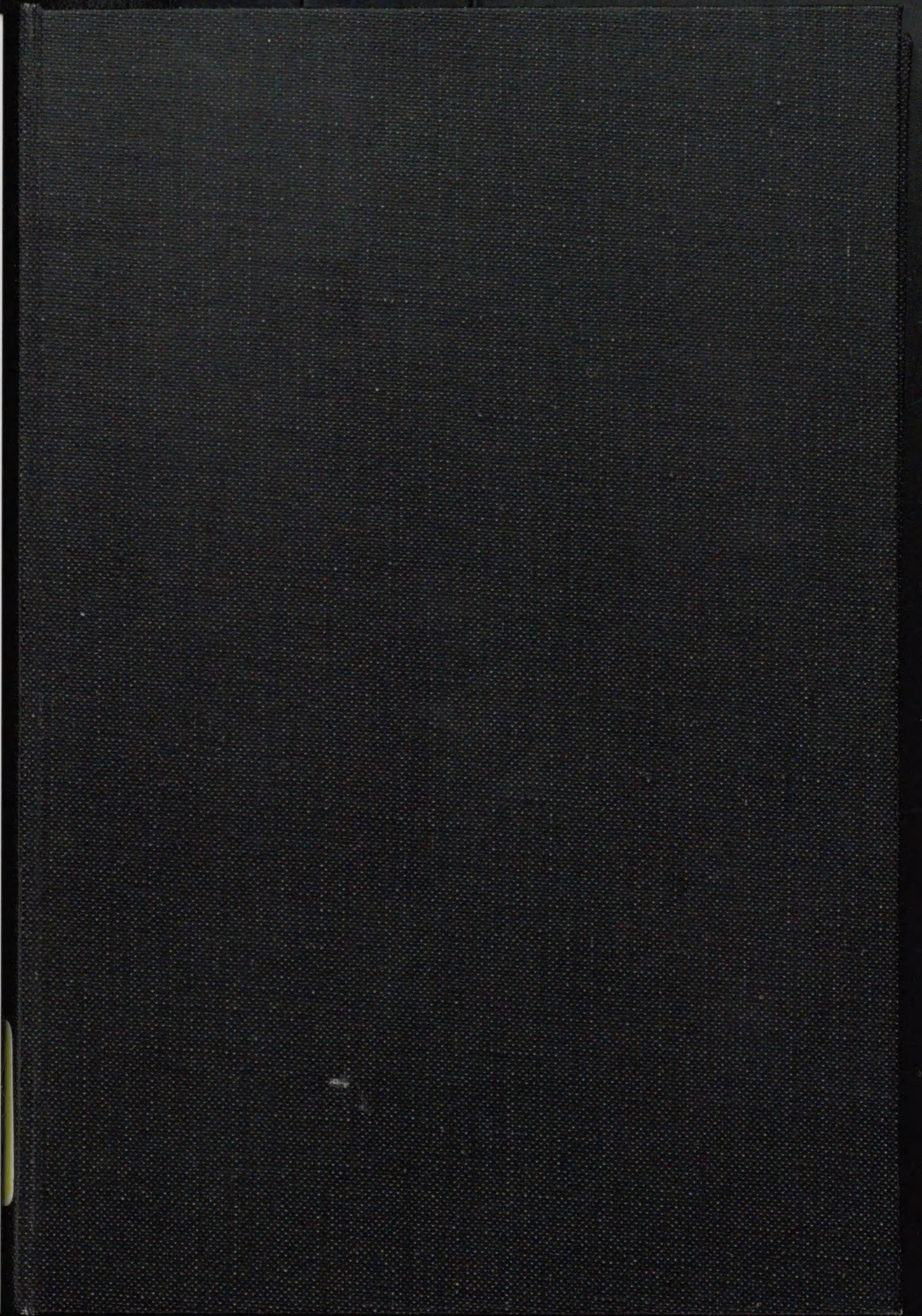
ゴ ス ア 問題 研究所編	ゴ ス ア 問題 研究所編	ゴ ス ア 問題 研究所編	ゴ ス ア 問題 研究所編	ゴ ス ア 問題 研究所編	ゴ ス ア 問題 研究所編	ゴ ス ア 問題 研究所編	ゴ ス ア 問題 研究所編	ゴ ス ア 問題 研究所編	ゴ ス ア 問題 研究所編	ゴ ス ア 問題 研究所編	ゴ ス ア 問題 研究所編
五ヶ年計畫原案	五ヶ年計畫の總結	ソヴェト教育の全貌	ソヴェト大學生の性生活	唯物戀愛觀	辨證法讀本	滿洲と日露戰爭	最近のソヴェト建築	ひらかれた處女地	十二の椅子		
三四六版 三四〇頁 送料	三四六版 三四〇頁 送料	二四六版 二六七頁 送料	二四六版 二七〇頁 送料	三四六版 三二〇頁 送料	二四六版 二七〇頁 送料	三五〇頁 送料	寫真多數 送料	四六〇頁 上二、三 下二、三 送二〇	四三〇頁 送料		
定價一・〇〇	定價一・五〇	定價一・〇〇	定價一・〇〇	定價一・三〇	定價一・〇〇	定價一・二〇	定價二・五〇	定價一・五〇	定價一・五〇		

エトY71

目書版出社カウナ

林房雄著	文學のため	四六版	四一〇頁	送料一、三四
徳永直著	新しき出發	三四六版	三二〇頁	送料一、〇二〇
渡邊順三著	短歌の諸問題	三四六判	三二〇頁	送料一、〇〇〇
セリグエリン著 トリフオノフ著 ロシア問題研究所譯	現代ソヴェト文學概論	三四六判	三五〇頁	送料一、二二〇
ネチキナ著 村井勇譯	「資本論」の文學的構造	一四六判	一七〇頁	送料一、七八〇
園部四郎篇	赤軍(寫真集)	菊倍版	送料一、八六〇	
ロシア問題研究所譯	ソヴェトにおける母と子供の保護	一四六版	一六〇頁	送料一、八〇〇
イシチエンコ編 廣島定吉譯	唯物辨證法辭典	三四六判	三〇〇頁	送料二、〇二〇
三好十郎著	斬られの仙太	三四六版	三〇〇頁	送料一、〇二〇
ロシア問題研究所報告	日ソ戦ふべきか?	二〇〇頁版	二〇〇頁	送料一、〇六〇
ロシア問題研究所報告	第一二五ヶ年計畫の全貌	三〇〇頁版	三〇〇頁	送料一、〇八〇



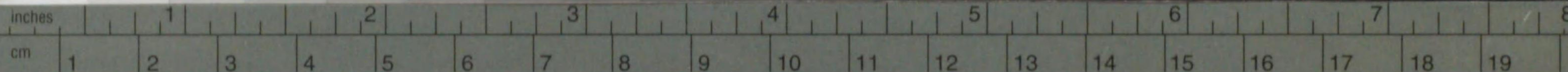


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

